誰もが無限の可能性を
抱きしめて生まれてきた

そう、君にも必ず
何かを変えるチカラがある。

001 目次

Features
「読」から「解」へ
1.〈結論形式〉を意識する

002 【1】三浦雅士『考える身体』　神大 17

004 【2】小坂井敏晶『『神の亡霊』6　近代の原罪」　東大 19・理文共通

research 入試問題リサーチ

006 research.1 宇野邦一『政治的省察　政治の根底にあるもの』　阪大(法・経済・人科・外) 20

007 research.2 中村桂子『科学者が人間であること』　阪大(法・経済・人科・外) 19

008 【3】湯浅博雄「ランポーの詩の翻訳について　東大 13・理文共通

010 【4】安藤宏『「私」をつくる　近代小説の試み』　京大 17・理系

春のテーマ1〈結論形式〉を意識する

【1】次の文章を読んで、後の問いに答えよ。［神大17］

感動の身体

舞踊ほど根源的な芸術はない。ここ二十年来、バレエや日本舞踊を熱心に見つづけてきて、繰り返しそう思った。

感動とは身体的なものだ。人によっては、理論的な何かがまずあって、その理論に近いものに出会って感動するということがあるのかもしれない。だが、それはたぶん偽物である。ほんものの感動はそんな余裕を与えない。それは嵐のように、突風のように襲ってくるのである。(a)コドウが高まり、背筋が青ざめる。文字通り、打ちのめされるのである。

感動は相対的なものではない。絶対的なものだ。嵐が過ぎ去って、これはいったい何だったのかと、人は考える。感動する身体とはいったい何か。そしてまた、感動させる身体とはいったい何か、と。だが、考えているそのそばから、さらにまた新たな感動が襲ってくる。身体が震えるのである。こうして、なかば陶酔し、なかば覚醒しているという不思議な状態に置かれる。これこそ舞踊の醍醐味なのだ。

この舞踊の醍醐味のなかで、感動とは身体の問題であると考えるようになった。あるいはマイケル・ポラニーに倣って暗黙知の問題と言っても、市川浩に倣って精神としての身体の問題と言ってもいい。いずれにせよそれは、精神だけの問題ではない。それ以上に身体の問題なのだ。だが、身体の問題とはいっても、その奥行は絶望的なほどに深い。というより、その奥行は、人間というものの不気味さに等しいのである。

たとえば言葉だ。誰もが精神の問題だと考えている。だが、言葉は精神の問題である以上にはるかに身体の問題なのだ。いずれ生成文法学派がその仕組みを詳しく解明するだろうが、母語は、生得の言語能力によって身体的に獲得されるのであって、理屈によって獲得されるのではない。というか、身体的に獲得された母語によってはじめて理屈もまた可能になるのである。

しばしば言われることだが、外国語を習得する近道はリズムやアクセントもろとも文を丸暗記することである。丸暗記する近道は、ひたすら音読を繰り返すことである。目だけではなく耳も口も参加させ、さらには全身すなわち触覚をも参加させることなのだ。体得である。体得されない言葉は使いものにならない。事実、文学作品、とりわけ詩の微妙な味は、言語の身体性によって構成されているとしか言いようがないのである。(ア)腑に落ちるという言葉

は、理解するという言葉以上に理解の実質を語っている。

（三浦雅士『考える身体』より）

〔注〕○暗黙知 ―― マイケル・ポラニー（一八九一～一九七六）が提唱した概念。経験や勘のように、意識化・言語化の困難な身体レベルの知を指す。

○市川浩 ―― 哲学者（一九三一～二〇〇二）。

○生成文法学派 ―― 人間が生まれながらに普遍的な文法を有するという考えに基づく言語学派。

問一 傍線部(a)を漢字に改めなさい。はっきりと、くずさないで書くこと。

問二 傍線部(ア)「腑に落ちるという言葉は、理解するという言葉以上に理解の実質を語っている」とあるが、どういうことか。八〇字以内で説明しなさい。

【2】次の文章を読んで、後の設問に答えよ。［東大・理文共通 ２０］

学校教育を媒介に階層構造が再生産される事実が、日本では注目されてこなかった。米国のような人種問題がないし、英国のように明確な階級区分もない。エリートも庶民もほぼ同じ言語と文化を共有し、話をするだけでは相手の学歴も分からない。「一億総中流」という表現もかつて流行した。そんな状況の中、教育機会を均等にすれば、貧富の差が少しずつ解消されて公平な社会になると期待された。しかし、ここに大きな落とし穴があった。

機会均等のパラドクスを示すために、二つの事例に単純化して考えよう。ひとつは戦前のように庶民と金持ちが別々の学校に行くやり方。もうひとつは戦後に施行された一律の学校制度だ。どちらの場合も結果はあまり変わらない。見かけ上は自由競争でも、実は出来レースだからだ。それも競馬とは反対に、より大きなハンディキャップを弱い者が背負う競争だ。だが、生ずる心理は異なる。貧乏が原因で進学できず、出世を断念するならば、当人のせいではない。不平等な社会は変えるべきだ。批判の矛先が外に向く。対して自由競争の下では違う感覚が生まれる。成功しなかったのは自分に能力がないからだ。社会が悪くなければ、変革運動に関心を示さない。

アファーマティブ・アクション（積極的差別是正措置）は、個人間の能力差には適用されない。人種・性別など集団間の不平等さえ是正されれば、あとは各人の才能と努力次第で社会上昇が可能だと信じられている。だからこそ、弱肉強食のルールが正当化される。ア不平等が顕著な米国で、社会主義政党が育たなかった一因はそこにある。

子どもを分け隔てることなく、平等に知識をaツチカう理想と同時に、能力別に人間を格付けし、差異化する役割を学校は担う。そこに矛盾が潜む。出身階層という過去の桎梏（しっこく）を逃れ、自らの力で未来を切り開く可能性として、能力主義（メリトクラシー）は歓迎された。そのための機会均等だ。だが、それは巧妙に仕組まれた罠（わな）だった。「地獄への道は善意で敷き詰められている」という。平等な社会を実現するための方策が、かえって既存の階層構造を正当化し、永続させる。社会を開くはずのメカニズムが、逆に社会構造を固定し、閉じるためのイデオロギーとして働く。しかし、それは歴史の皮肉や偶然のせいではない。近代の人間像が必然的に導く袋小路だ。

（小坂井敏晶『神の亡霊』6　近代の原罪」による）

問　傍線部（ア）「不平等が顕著な米国で、社会主義政党が育たなかった一因はそこにある」とあるが、なぜそういえるのか、説明せよ。

research 入試問題リサーチ

(research.1) 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。[阪大(法・経済・人科・外) 20]

国家とは何か、と考えはじめると、なぜ国家について考えようとするのか同時に問わざるをえない。いたるところで、〈国民主権〉を前提とするはずの国家が、分厚い制度や機関としてあり、実はあいかわらず国民から遠いところに、そびえたつようにしてある。国家とは〈私たち〉であり、〈私たち〉のものであり、〈私たち〉の思考、意志、力が形成する政体であり、公共性であるはずだが、実感としては、そんなふうに存在していない。むしろ統治(政府、行政)の機関から、立法、司法の機関そして「軍隊」ではないと言われる「自衛隊」まで、たくさんの官庁の建築や、そこに出入りする公務員や、「国」の行方をリードするという政治家たちの集団が、まず「国家」のイメージとして浮かんでくる。そのような機関、制度を構成する人間たちの活動が国家であり、それは少なくとも名目上は、隅々まで法的に規定されている。カール・シュミットの書物(『憲法論』)には、国家を、何よりもまず法的規範によって定義する明瞭な記述が見える。「国家は厳重にコントロールされた、社会の(a)ジュウボクとみられる。国家は完結した法規範の体系の下におかれ、あるいは単純にこの規範体系と同一視せられ、したがって国家は規範または手続き以外のなにものでもない」(カール・シュミット『憲法論』)。

もちろん法が国家の実体なのではなく、国家はあくまでも人間の集団(人民)であり、その集団の(統一された)状態である。「国家は人民の特定の状態、しかも政治的統一の状態である。国家形体はこの統一体の特殊な形成の様式である。国家のあらゆる概念規定の主体は人民である。国家は状態であり、しかも人民の状態である」(カール・シュミット『憲法論』)。

しかし国家とは、単にそのような国の制度を構成する、比較的イメージしやすいヒトやモノの集合ではなく、それを全体として規定する法的体系そのものでもない。確かに、はるかそれ以上のものを意味するようなのだ(ちなみにフランシス・フクヤマ『政治の起源』は、政治の三大要素として、「国家」、「法」、「説明責任」をかかげて包括的な政治の世界史を試みているが、その「国家」とは、端的に、整備された〈官僚制度〉を示すにすぎず、ナショナリズムのような観念とは、あくまで分離して考察している)。

(宇野邦一『政治的省察　政治の根底にあるもの』青土社　二〇一九年より)

(research.2) 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。［阪大（法・経済・人科・外）１９］

二〇一一年三月一一日の大地震と津波、それによって引き起こされた東京電力福島第一原子力発電所の事故は、日本列島に暮らす者としての生き方を考えることを求めるものでした。

その一瞬前まで誰もこんなことが起きようとは思ってもいなかったのです。実は私はその時、東京大学構内での会議に出席していました。これまで体験したことのない揺れに外へ飛び出し、地盤が固く安全だと言われて安田講堂の前に行きました。講堂の脇にある地震研究所からも研究者が出てきて、大地震のさなかに、まさに専門家のただなかにいることになったのです。

とは言え地震直後は何も情報がないので専門家も私たちと変わりません。地震がいつどこで起きるかという問いに対して学問ができることは、得られる精度最高のデータを用いての確率計算ですが、一方、被害に遭った人たちにとっては、地震発生は百パーセント起こってしまった出来事です。これは病気についても同じで、ゲノム（遺伝情報）や生活習慣を調べてがんや糖尿病などになる確率は出せても、ある個人がいつどの臓器のがんになるかはわかりませんし、すでに病気にかかってしまった人には、確率は役に立ちません。ここが、学問が日常と接点を持つことの難しさです。けれども、だから学問は無意味ということではなく、この違いをわかったうえで学問を生かしていかなければならないのだと、震災後さまざまな場面で強く感じました。

よく科学は難しいと言われますが、日常私たちが何気なく接している自然や人間ほど難しいものはないわけで、科学はむしろその中から考えやすい、やさしいところをとり出して扱っているとも言えます。それなのに社会の側では、科学は進歩しているのだから答を出してくれるはずと、自然や人間そのものとも言える地震や病気についての判断（とくに予測）をここに期待し、科学もまたそれに答えようとしてしまうのです。

（中村桂子『科学者が人間であること』（二〇一三年）より）

【3】次の文章を読んで、後の設問に答えよ。［東大・理文共通　１３］

詩人―作家が言おうとすること、いやむしろ正確に言えば、その書かれた文学作品が言おう、言い表そうと志向することは、それを告げる言い方、表し方、志向する仕方と切り離してはありえない。人々はよく、ある詩人―作家の作品は「しかじかの主張をしている」、「こういうメッセージを伝えている」、「彼の意見、考え、感情、思想はこうである」、と言うことがある。筆者も、ときに(長くならないよう、短縮し、簡潔に省略するためにせよ)それに近い言い方をしてしまう場合がある。しかし、実のところ、ある詩人―作家の書いた文学作品が告げようとしているなにか、とりあえず内容・概念的なものとみなされるなにか、言いかえると、その思想、考え、意見、感情などと思われているなにかは、それだけで切り離され、独立して自存していることはないのである。〈意味され、志向されている内容〉は、それを〈意味する仕方、志向する仕方〉の側面、表現形態の面、意味するかたちの側面と一体化して作用することによってしか存在しないし、コミュニケートされない。だから〈意味されている内容・概念・イデー〉のみを抜き出して「これこそ詩人―作家の思想であり、告げられたメッセージである」ということはできないのだ。

それゆえまた、詩人―作家のテクストを翻訳する者は、次のような姿勢を避けるべきだろう。つまり翻訳者が、むろん原文テクストの読解のために、いったんそのテクストの語り方の側面、意味するかたちの側面を経由して読み取るのは当然なのであるが、しかしこのフォルム的側面はすぐに読み終えられ、通過されて、もうこの〈意味するかたちの側面〉を気づかうことをやめるという姿勢は取るべきでない。ア<u>もっぱら自分が抜き出し、読み取ったと信じる意味内容・概念の側面に注意を集中してしまうという態度を取ってはならない</u>。そうやって自分が読み取った意味内容、つまり〈私〉へと伝達され、〈私〉によって了解された概念的中身・内容が、それだけで独立して、まさにこのテクストの〈言おう、語ろう〉としていることをなす(このテクストの志向であり、意味である)とみなしてはならないのである。

翻訳者は、このようにして自分が読み取り、了解した概念的中身・内容が、それだけで独立して(もうそのフォルム的側面とは無関係に)、このテクストの告げる意味であり、志向であるとみなしてはならず、また、そういう意味や志向を自分の母語によって読みやすく言い換えればよいと考えてはならないだろう。

自分が抜き出し、読み取った中身・内容を、自らの母語によって適切に言い換えれば[a]シュビよく翻訳できると考え、そう実践することは、しばしば読みやすく、理解しやすい翻訳

作品を生み出すことになるかもしれない。ただし、そこには、大きな危うさも内包されているのだ。原文のテクストがその独特な語り口、言い方、表現の仕方によって、きわめて微妙なやり方で告げようとしているなにかを十分に気づかうことから眼をそらせてしまうおそれがあるだろう。

少し極端に言えば、たとえばある翻訳者が「これがランポーの詩の日本語訳である」として読者に提示する詩が、ランポーのテクストの翻訳作品であるというよりも、イはるかに翻訳者による日本語作品であるということもありえるのだ。

それを避けるためには、やはり翻訳者はできる限り原文テクストをｂチクゴ的にたどること、〈字句通りに〉翻訳する可能性を追求するべきだろう。原文の〈意味する仕方・様式・かたち〉の側面、表現形態の面、つまり志向する仕方の面に注意を凝らし、それにあたうかぎり忠実であろうとするのである。

（湯浅博雄「ランポーの詩の翻訳について」）

〔注〕○フォルム――forme（フランス語）、form（英語）に同じ。
○ランボー――Arthur Rimbaud（一八五四～一八九一）フランスの詩人。

設　問

（一）「もっぱら自分が抜き出し、読み取ったと信じる意味内容・概念の側面に注意を集中してしまうという態度を取ってはならない」（傍線部ア）とあるが、それはなぜか、説明せよ。

（二）「はるかに翻訳者による日本語作品である」（傍線部イ）とはどういうことか、説明せよ。

＊補・京大志望者

問　傍線部イとはどういうことか、説明せよ。（４行枠）

【4】次の文を読んで、後の問に答えよ。［京大・理系 17］

今日ごくあたり前に使われている「言文一致体」は、明治二〇年頃から明治四〇年近くまで、およそ二〇年かけてようやく一般化していった。たとえば『吾輩は猫である』（明治三八～三九年）なども、この文体が一気に広まっていく渦中に世に問われた小説だったのである。猫に「～である」という演説調で語らせるなど、それまで思いもよらなかった実験が可能になったわけで、小説の表現領域や発想はこれを機に急速に広がっていくことになる。激石が齢（よわい）四十近くなって初めて小説の筆を執ったのも、また森鷗外が長い中断を経て現代小説の執筆を開始するのも、この新しい文体に触発された側面が大きい。文体をめぐるそれまでの伝統を見切ったことを代償に、近代小説は一気にその全盛時代を迎えることになったわけである。

言文一致の利点は、なんと言ってもその平明な「わかりやすさ」にあったのだが、これと並び、当時しばしばその長所とされたのが、記述の「正確さ」であった。物事を正確に写し取っていく写実主義の浸透にともない、「言文一致体」は日常のできごとを ありのまま に描写していくのにもっともふさわしい手立てであると考えられたのである。

だが、考えてみると、(1)これはそもそもおかしなことなのではないだろうか。

口語（会話）は、本来きわめて主観的なものであるはずだ。表情やみぶりで内容を補うこともできるし、あらかじめ共有されている話題であれば、自由に内容を省略することもできる。当時の描写論議、あるいは言文一致論議を見ていて奇妙に思われるのは、主観的な口語を模したこの文体がもっとも「客観的」で「細密」である、とまじめに信じられていた形跡のあることだ。急速に広まっていく写実主義の風潮の中で、過度に客観性が期待されてしまった点にこそ、おそらくはこの文体のもっとも大きな不幸と矛盾、同時にまた、それゆえの面白さがあったのではないだろうか。

（安藤宏『「私」をつくる　近代小説の試み』より）

問一　傍線部(1)について、筆者がこのように考えるのはなぜか、説明せよ。［2行枠］

(note)

現代文論述 S

OUR TEXTBOOK 2024

1 学期

Features

〈読中心〉 構文と構造

構造❶ 014 【1】山崎正和『演技する精神』

016 【2】山崎正和『日本文化と個人主義』

構造❷ 018 【1】村上陽一郎「自己の解体と変革」

024 【2】馬場あき子「おんなの鬼」

構文❶ 028 【1】檜垣立哉『食べることの哲学』 神大 19

032 【2】杉本秀太郎『散文の日本語』

構文❷ 036 【1】鵜飼哲 「ナショナリズム、その〈彼方〉への隘路」 東大 22・理文共通

040 【2】リービ英雄「『there』のないカリフォルニア」

〈文学的文章〉の論述

共通テスト小説対策 044 【1】加藤幸子「海辺暮らし」

054 【2】三浦哲郎「まばたき」

文学的文章・歌論 060 河野裕子「ひとり遊び」 東大 12・文科

1　評論　読中心〈構造〉①

【1】次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

芸術とは、人間が自分の感情を、何らかの手段によって表現し、明確化することである。人間は、自分の感情が何とも言い難いときに苦しむ。芸術はまさにそういう人間にたいする救済としてある。芸術は自分の表現しがたい感情を明確なものに変えて、自分の意識できる部分におく活動である。

表現とは、感情発見の作業であり、自分の外部に作品を作ることで自己の内面を確認することである。このとき、人間の感情は外の世界に関わることから生まれるものであることから、内部を明確化するということは、外部を明確化することでもある。

この意味で、芸術は感情を通じてものを正しく見定める方法である。また、科学や哲学と並んで、これとは別の方法によるもうひとつの世界認識の営みともいえる。すわなち、人間は表現することで、認識するのである。

そして、芸術がこのようなものであるならば、ア行動の構造の点で、技術活動とは正反対のものになる。なぜなら、技術活動は特定の目的をもち、自らが何を目指しているかを明確に知っているのに対して、芸術活動はそれを知らないところから出発するからである。指物師が机を作る場合、彼は机の厳密な設計図を持ち、それを作るのに相応しい手段を持っている。詳細に決められた工程で製作の実行を進めていく。

それに対して、詩人が詩を作る場合、彼は胸中にある漠然とした気分と、それを表現したいという気持ちしか持っていない。試行錯誤の末に、ようやく自分の感情を言い当てた言葉を見つけるのだろうが、そのとき彼は言葉とともに自身の感情も発見したといえる。その瞬間、彼の詩は設計図を超えて、完全な作品となっている。

要するに、芸術活動は技術活動とはちがって、そのなかに目的と手段の区別がなく、材料と完成品の区別がなく、企画段階と実行段階の区別がなく、いうならば、行動の目的と過程の区別のない行動だ、と見ることができる。

技術活動が目的を目指して前方へ進む行動だとすれば、芸術活動は出発点を見つめつつ後ずさりする行動である。進むにつれて、芸術家の眼にはその背後の世界が大きく見えるのであり、言い換えれば、自分を出発点に配置して、今も衝き動かしている力が見える。

いわば、イ彼は自分の出発点の含蓄を知り、その全体像を見きわめるために後ずさるので

あって、やがてその全貌が残りなく見えた瞬間、彼は自分の行動そのものを完結したといえる。

（山崎正和『演技する精神』）

問一　傍線部ア「行動の構造の点で、技術活動とは正反対のものになる」とはどういうことか、説明せよ。

問二　傍線部イ「彼は自分の出発点の含蓄を知り、その全体像を見きわめるために後ずさる」とあるが、どういうことか、説明せよ。

【2】次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

誰もが認めることだが、近代以前の古い文化観は、洋の東西を問わず、意識的、無意識的に大国主義的な傾向を秘めていた。古代ギリシアに始まる西洋でも、中国歴代の王朝社会でも、みずからの生活様式をほかにない固有性として捉え、しかもそれを内外に施してもとらない価値とするのが、常識であった。いいかえれば、みずからの生活様式だけが文化であり、その外には文化の空白である ア ヤバンが広がっていると考え、それを軽蔑して無視するか、あるいは力をふるって教化しようとするのが、文化観の古典的なかたちであった。

この考え方は、じつは西洋ではひそかに近代以後にまで生きのび、植民地への宣教や、民族間の戦争を支える理論として使われてきた。たとえば、西洋文化を個人主義の文化としてイ キテイし、それに対して日本文化を集団主義の文化と呼ぶ人たちは、多くの場合、暗黙のうちにこの大国主義的な文化観に毒されている。彼らは一方で、個人主義を西洋にしか見られない特色だと思い込み、しかも同時に、人間にとって一般的に個人は集団よりも本質的なあり方だと考えている。当然、本質的なものは普遍的であるから、普遍性が文化の生命だとすれば、西洋の個人主義は日本の集団主義よりも、文化的に質の高いものだということになる。

明らかに、この文化観が犯しているのは単純な論理の誤りであって、もし人間にとって本質的で普遍的なものがあれば、［ I ］という理屈が見落とされている。

じっさい、一、二、三といった整数の観念や、上下、左右、大小といった認識の形式は、限りなく普遍性に近い広がりを持っているが、そういうものは、現にどんな文化にも始めから共有されている。かりに表面上、ひとつの文化にめだって他の文化にはめだたない特色があるとしても、もしそれが人間一般の本質に根ざした特色なら、必ずその ウ ホウガはどんな文化にも内在的に隠れているであろう。そこに見られる文化の違いは、何ものかの現れ方の程度の違いにすぎず、他の特色とのつりあいの違いにすぎないはずである。それにつけて、室町時代の末期、日本には使命感に溢れた西洋の宣教師たちが訪れたが、彼らを相手に当時の日本人が交わした愉快な会話が思い出される。宣教師たちは、当然のこととして、キリスト教の神が永遠普遍の真理であることを説き、その教えにめざめるよう民衆を諭した。これにたいして日本人は、Aもしそれが永遠の真理であるなら、なぜ自分たちがそれを始めから知らずにいて、歴史上の今、あらためて教えられねばならないのか、と訊(たず)ね返したと言われる。

（山崎正和『日本文化と個人主義』）

問一　傍線部ア～ウのカタカナを漢字に直せ。

問二　空欄 I を補うのに適当な表現を、自分で考えて記せ。

問三　傍線部A「もしそれが永遠の真理であるなら、なぜ自分たちがそれを始めから知らずにいて、歴史上の今、あらためて教えられねばならないのか」とあるが、日本人が宣教師に、そう「訊ね返した」のはなぜか。その理由を五〇字以内で記せ。

2　評論　読中心〈構造〉②

【1】次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

どうすれば、喜ばしき形の学問があり得るのか。どうすれば、「自己解体」があり得るのか。

その点について私はこんな風に考えている。一つの比喩を使わせて戴こう。見ず知らずの外国へ行く。使われている言語も違う。日常的習慣も違う。人間なら生理的に共通にプログラムされていると言われる顔の表情でさえ、自分とは違う。葬式で涙を流さなければならない民族、葬式で泣いてはならない民族、相手の目を真直ぐ見詰めて話さなければならない民族、そうすることを失礼と考える民族、ボディ・ランゲージで発する信号のそれぞれが民族を超えると異なり、国境を超えると変わる。

そうした異文化と接触したとき、われわれは驚く。その驚きは、もとより、未知のものに出会うことによって触発される驚きには違いないが、しかしそれはまた同時に自らのなかにあるものを発見した驚きでもあると言えよう。

自分のなかにあると思っていなかったもの、当然の前提として自分がその上に載っていながら、それが余りにも当然の前提であるがゆえに、対自的に取り出して検討してみることさえ、全くなし得なかったものに、それとは全く違った前提に立っている存在との接触を通じて、初めて気付かされる。A その種の驚きもまた、同時にそこには含まれている。

そうした状況は、一種の文化人類学的な驚きと言うことができる。そして、一般に学問、喜ばしき学問のありようは、このような文化人類学的な驚きの発見である。

もとよりそこには、一つの重要な要件がある。異文化に接触するときに、こちら側の文化の規範を異文化に当てはめ、こちら側の暗号のコードを使って相手を読んだとしても、意味ある驚きは得られない。得られるのは、相手に対する軽蔑か無視かでしかない。

したがって、今日文化人類学者は、自らの文化的コードを異文化に持ち込むことを、極端に警戒する。しかし、文化人類学の差し当たっての目的は、相手の文化的規範や明文化されない行動価値規範やらを、できるだけ、その地域の文脈に即して、理解することであった。われわれが今取り上げている問題の本質はそこにはない。

そもそもいかに理想的な文化人類学者といえども、自分のなかにあるすべての文化的規範のコードを脱ぎ捨ててしまうことなどできるわけではない。ただ、B 問題の核心はまさしく

そこにある。相手の文化的コードを、相手の文化的文脈に即して理解しようとすればするほど、われわれは、自分のなかにある文化的規範を、一つずつ脱ぎ捨てなければならないことになる。簡単に言ってしまえば、相手の文化的コードを姿見とし、それに自らの文化的コードを映してみることによって、われわれは、自己を発見し、自己を解体し、新たな自己とその共同体を目指すための材料を得るのでもある。

自らの文化的コードをすっかり脱ぎ捨ててしまうことはできない。自らのうちに一切の文化的コードをもたないような素裸の人間は、恐らくもはや人間とは言えまい。しかし異文化のコードを理解しようとするとき、逆に否が応でも自分のなかにあるそれが明らかになることは確かであろう。

文化人類学というのは、共時的に存在している諸文化を超えた視点でそうした作業が営まれる。しかし、これとよく似た構造をもっていながら、視野が共時的な存在の地平を見通すのではなく、継時的なそれを見通そうとする分野もある。それは歴史である。

現代に生きる人間としてのわれわれが、ある歴史的な過去に迫ろうとするとき、われわれが現代のわれわれの前提とするさまざまな規範のコードのなかにとじ籠る限りは、決して過去を理解することはできない。

とりわけ科学史の場合にはこの問題は深刻である。なぜなら、自然科学にあっては、ほとんどア・プリオリに、過去の理論は誤りであって現在の理論が正しいと考えられているからである。つまり、もしそのことを認めてしまうと、過去は、現代の状況にどれだけ近いか、という点でのみ関心を持たれることになり、過去を過去として、いわばまるごと理解する、などということは、およそ不必要となり、無意味になってしまう。

だが、もし科学の歴史というものが、そういう種類の学問的営みであるとすれば、それは文字通り、最もC「退屈な学問」にならざるをえない。なぜなら、すでに存在しすでに確立されている絶対的な規範としての「現在」のなかに、過去を再確認する、という作業だけが、科学の歴史に残されることになるからである。

しかし、私は科学の歴史もまた、他のすべての歴史の営為と同じく、過去の状況を、できる限りその全体的文脈のなかで、理解しようとする営みだと考えている。なるほどクローチェの言う通り、一切の歴史は現代史であるのかもしれない。しかしそのことの意味は、決して現代の立場から、すべての過去を截断することではあるまい。むしろ過去に、過去としてぶつかるからこそ、現代のわれわれの無自覚な前提、明文化されない立脚点が顕れる、とい

う意味で考えたい。

それゆえ、歴史的驚きの発見は、文化人類学的驚きの発見が、共時的に存在する異文化との接触による自己の解体作業に連なるのと同じように、継時的に存在する異文化との接触による自己の解体作業に連なるのだ、と言うことができよう。

文化人類学型にせよ、歴史研究型にせよ、いずれの場合にも、時間軸の違いこそあれ、結局は、知的営為が、自己の確認と自己の解体ということを目指しているのであるとすれば、多かれ少なかれすべての学問は、これと同じ構造を持っていると言えるのではなかろうか。つまり、学問、喜ばしき学問とは、つねに、どういう方向にか、自己、D日常的な自己の解体に対面させるような種類のものだ、と言ってよいだろう。

（村上陽一郎「自己の解体と変革」）

（注）○ア・プリオリ … 先天的。先験的。

問一　傍線部A「その種の驚き」とはどんな驚きか、次の①～⑤のうちから、最も適当なものを一つ選べ。

① 自分のうちにあった未知なるものにはじめて気づいた驚き。
② 自分のうちにあるものとはまったく違うものをもつ人間の存在を知った驚き。
③ 自分のうちにのみあると思っていたものが他の人間にも存在することを知った驚き。
④ 自分が人間の本質だと考えていたものを持っていない人間の存在を知った驚き。
⑤ 自分と同じ前提に立ちながらまったく違う存在の仕方のあることを知った驚き。

問二　傍線部B「問題の核心はまさしくそこにある」とあるが、なぜか。説明せよ。

問三　傍線部C『退屈な学問』にならざるをえない」とあるが、どういうことか。説明せよ。

問四　傍線部D「日常的な自己の解体」とはどういうことか、次の①～⑤のうちから、最も適当なものを一つ選べ。

① 今まで無自覚に肯定してきた自己を見直し改めることで、新しい自己へと変化させること。
② 自己が属する文化的規範を拒否し、進んで異文化に接触していこうとすること。
③ 現在の自己が、過去のどのような蓄積の上に成立しているかを把握し直すこと。
④ 現在の自己を白紙の姿に戻し、新しい態度で喜ばしい学問を身につけようとすること。
⑤ 知的営為としての学問によって、平凡な自己を確認して再出発の準備をすること。

（補問）

問二　傍線部Ｂ「問題の核心はまさしくそこにある」とあるが、筆者はここからどのようなことを導き出そうとしているのか。次の①～⑤のうちから、最も適当なものを一つ選べ。

① 自らの文化的コードを当てはめるのではなく、むしろそれを警戒することの方が、異文化に接しそれを理解する態度としては正しいものであるということ。

② 異文化と自分の文化との質的な差異を考えて新しい学問を創造するためには、異文化をその文脈に即して虚心に理解することが必要であるということ。

③ 自らの文化的コードを当てはめることでも、それを簡単に脱ぎ捨てることでもなく、相手の文化的文脈に即して異文化を理解することが自己の解体になるのだということ。

④ 異文化に接して、完全には自らの文化的コードを脱ぎ捨てることができないことを知り、その上で両者の違いを理解することが大事だということ。

⑤ 異文化を理解しようとする過程で、自らの文化的コードを完全に脱ぎ捨てることができないのを知り、それが自分を発見することにつながるのだということ。

(note)

【2】次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

芸能に登場する鬼は、女に対して特別な関心を寄せているものが多い。女を奪い、女をさいなみ、女に憧れ、とかく女を媒介として、この人間の世との葛藤に一段の花をそえているといえる。どうも、鬼と女というかかわりを考えてみると、この場合女は、鬼という怪異の世界と人間の世界とを結ぶ一つのやさしいかけ橋の役割を負っているように思われる。

鬼には、巨大さや、怪力や、血なまぐさい惨虐のイメージが強いが、時にはそれ以上に花や、美女や、笛の音などが似合わしいと思われるのは、怪異としての鬼の内がわが、じつはたえず、こうした抒情的なやさしさや、人間的ななつかしさ、美しさなどに脆い、憧れの情を抱いていることの証拠ではあるまいか。

そして、表現としての鬼と女とは、最も遠い対極でありながら、内面的な働きという一つの円環の中では、思いがけぬ近さの背中合わせの距離になっていて、極から極への異質な遠さは、じつは一瞬の飛躍によってたちまち変質のとげられる表と裏の関係であったりするのだ。

理屈っぽいいい方になってしまったが、私はそうした鬼と女のかかわりから、さらには女から鬼への変貌のドラマに関心をもつ。

A 一四の鬼がひっそりと女の貌をして人間にひそんでいることは、一方からみれば哀しいことではあるが、一方からみれば、またたいへん怖ろしいことであるにちがいない。たとえば『今昔物語』は、山深く住む猟師の兄弟の母が、いつのまにか鬼になっていて、子を食おうとしたという話を伝えている。母という最も安心できる、日常そのものの代表のような部分が、いつのまにか怖ろしいものに変質しているという、このこわさは、ことの異様さ以上に示唆的で、日常的な安心や油断の中に思いがけずしのびこんでいる敵意や、目に見えず変質しているものの危うさを感じさせる。鬼の存在がほんとうに怖ろしいのは、山や島などに要塞をかまえている挑戦的な鬼よりも、こうした日常の中に溶けこんだ形で存在する敵意や(ア)ハイシンであろう。

この猟師の母がなぜ鬼になっていたのかはわからないが、さまざまな推察とともにもう一つ思い出されるのは、奥州黒塚の鬼の話である。

黒塚は福島県二本松にいまもその旧蹟を残している。ここ阿武隈川一帯に広がって、安達が原とよばれていた大原野は、かつてはどれほど荒寥としてさびしい所であったろう。この原野の一つ家に住む老女が、道のゆききの旅人を泊めては殺害し、物品を奪っていた、

という。これだけでは鬼というより殺人強盗という方が当たっているが、土地の伝説はもう一つこれに人情劇的ドラマを加えている。

それによれば、ここに流離して住みついた老女は、もと都の公家に仕えた女であったが、主家の幼君がことばを話せなかったため、これを何とか治したいと念じていた。ところが、この(イ)トッコウヤクとしては妊婦の腹にある胎児の生き肝しかないと知らされ、この淋しい人目のない安達が原で、不運な妊婦の通るのを待っていたというのである。

何年かたったある日、都から親をたずねて下ってきた夫婦を泊めたが、老女はこの女が妊娠しているのをみて喜び、男をだまして外出させ、ついに女を殺害してしまう。その後女のもっていた守り袋からそれが成長したわが娘と知って、老女は狂気し鬼になり、人殺しをはじめるようになったというものだ。

因果応報をまのあたり見せたような、芝居気のつよい創作的伝説だが、この劇のクライマックスはもう一つ用意されていて、その後那智の修験者東光坊がこの家に泊まり、屍臭漂う閨の内の惨虐を発見したために、羞恥憤怒の極、鬼の性をあらわし東光坊を殺そうと追いかけるという、鬼への変貌の場面がある。

そして、われわれは、なぜかこの鬼伝説の中に盛りこまれた因果応報のすがたや罪深い女の心の動揺を見ること以上に、ひたすらこの鬼への変貌の果敢な凄絶さに酔おうとするのである。B鬼への変貌――いったい、そこに期待されているものは何なのであろう。

われわれはたしかに、この老女の本性がはじめから鬼であったという解釈などは肯定しないだろう。老女はできるだけ平凡な、という以上に誠実な一女性であってほしいのだ。そして、そこから鬼への飛躍の中に、論理ではとうてい説明しがたい極限的な心情の混乱を、また、その生涯をこの一瞬に賭け捨てるほかなかった追いつめられた心の解明を、鬼への変貌をとおして肯きたいと求めているのである。

たとえばこの、黒塚の鬼女に象徴的に描き出されているような人生とは、いったい誰のために、何を生きたといえるものであろうか。老女が知らないでわが子を殺してしまった手のあやまちに狂気し、人殺しを重ねてゆく日々は凄絶であり無惨だが、それを見られたことの怒りと羞恥に思わず鬼へと変貌する刹那には、怖ろしいというよりはむしろ哀しく美しい要素がまじっている。そこにわれわれがみるものは、屈折に屈折を重ねたはて、無為にひとしい生を、殺意にまぎらわしつつ送っていた女の、激しい(注)フラストレーションの爆発の姿である。

（馬場あき子「おんなの鬼」による）

（注）フラストレーション――欲求不満。

問一　傍線部（ア）・（イ）を漢字になおせ。

問二　傍線部Ｂ「鬼への変貌――いったい、そこに期待されているものは何なのであろう。」とあるが、「そこに期待されているもの」とは何か。説明せよ。

（補充問題）

問２　傍線部Ａ「一匹の鬼がひっそりと女の貌をして人間にひそんでいることは、一方からみれば哀しいことではあるが、一方からみれば、またたいへん怖ろしいことであるにちがいない。」とあるが、なぜ「たいへん怖ろしい」のか。その理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

①　鬼は日常の世界とは異質な怪異の世界のものとして人間をさいなむものだから。
②　悲哀が深まれば深まるたけ惨虐なイメージが日常性を帯びることになるから。
③　自らのうちにひそむ鬼の性が日常の世界を変貌させてしまうから。
④　日常の世界が怪異の突然の出現によって脅かされることを示唆しているから。
⑤　日常的なものが思いがけないものに変容する危険性をはらんでいるから。

問３　傍線部Ｂ「鬼への変貌――いったい、そこに期待されているものは何なのであろう。」とあるが、「そこに期待されているもの」とは何か。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

①　懸命に生きながら、それが無為であったことを知った哀れな女が、激しく混乱し、瞬間的に鬼へと変貌するすさまじさ。
②　これまで積み重ねてきた自分の人生を無にするものの出現に対し、激しく立ち向かう、哀しいまでの女の生き方。
③　忍従を重ねてきた女が、これまでの人生を意義あるものに転換しようとして、鬼へと変貌する屈折した心理の動き。
④　誠実に平凡に他者のために生きてきた女が、激しい自我に目覚め、新たな価値を求めて生きようとする果敢な姿。
⑤　これまでの無意味に流れた時間を悟った女が、運命を逆転させ、凄惨な鬼女に突如変貌するドラマチックな怪異性。

3　評論　読中心〈構文〉①

【1】次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

人食について、おそらくわれわれはきわめて得体の知れない、まさしく心の奥底の澱（おり）のような(1)キヒ感をもっている。

われわれは動物であり、一定の間隔をもって食物を摂取しなければならない。植物のように光合成をしてエネルギーをつくることもできないし、草食動物のように大量の草を反芻（はんすう）することでいのちをながらえさせることもできない。何も食べ物がないときには、同種のものであれ何であれ、自らが生きるために食べる。食べなければ自分が死ぬ。

だがそこで、人食をなすかなさないかは、きわめて繊細な問題をひきおこす。大岡昇平は、あくまでもキリスト教理念をもちだしつつ「言葉」と「ロゴス」の世界でそれを敢然と拒絶する。だがわれわれは、さまざまな動物が共喰（ともぐ）いをすること、場合によっては、それは生態系的にも生存戦略的にも合理的な行為であるとのべることさえ可能である。

授業などでこの類いのはなしをすると、必ず学生が質問することがある。それはアンパンマンをどう考えるのかということである。

ただ私自身は、アンパンマンの作者であるやなせたかしという人物についても、この絵本（というか、すでに一種のキャラクターとして、アニメその他で多種多様に普及しているというべきだろう）についても、さして深く知っているわけではない。ただアンパンマンが、おなかがすいた者に、自分の顔を「食べさせる」ということは知っている。さらにいえば、それがやなせたかしの戦争従軍経験に(2)イキョするものであるという事実も知識としてはもっている。飢えのなかで何かできること、何かしてあげることとは、飢えている生き物、飢えている同僚に食べ物を与える以外にはない。そしてその極北が、自分を食べてもらうということでしかないこともよくわかる。

ただし、アンパンマンが「自分を食べてよ」といって、自分の顔をむしりとって食べさせる姿は、ある意味では(注1)ＮＨＫのサバンナの映像以上に異様な雰囲気をかもしだすものではないだろうか。繰り返すが、アンパンマンが食べさせるものは顔なのである。（もちろん、このキャラクターにとって顔がアンパンなのだから）。

この絵本の不思議さは、生命にとって、そしてとりわけ四肢動物全般にとって、その人格性＝パーソナリティを決定する器官である「顔」がそもそも食べ物であり、さらにそれを惜

しげもなくちぎって相手に与えることにある。これは自分の肉を食べさせる、他人の肉を食べるという(注2)カニバリズムよりも、アさらに業の深さを感じさせる(3)ショサではないだろうか。余談であるが、ヴェジタリアンのイギリス人の同僚が、切り身として皿にのった刺身は食べられるが、焼き魚は食べられないと話してくれたことがある。逆に日本人にとっては、豚の丸焼きを連想すればわかりやすいだろう。顔を食べろというのは、たんなるカニバルなものではなく、相当な抵抗感をひきおこすものである。ところがアンパンマンは、顔こそを食べさせるのである。食べてはいけないものの最たる部分が食べ物であるという矛盾が、この絵本のもっとも重要で衝撃的な点ではないのだろうか。

ところがアンパンマンには、もうひとつの奇妙な細工がなされている。これもまた衝撃的であるのだが、アンパンマンの顔とは、いささか驚くべきことに、いくらでもとり替え可能なのである。アンパンマンは、おなかをすかせた者に自分の顔を食べさせると、ジャムおじさんというコックの身なりをした登場人物が、ぱっとアンパンマンの顔をいれ替える。アンパンマンの顔そのものは複製可能で、何度もとり替えがきき、かくしてアンパンマンというキャラクターが死んだりすることはない。

これが相当に不思議な事態であることはいうまでもない。顔というのは、人間のみならず四肢動物にとって、唯一性を示す人格を顕示するものなのだから。「誰か」という判断は、普通は「顔」によってなされる。食べられる以上に、唯一的なものがとり替え可能であるということは、その設定をさらに奇妙にさせている。

アンパンマンの顔を食べるときに、実はさしたる罪悪感をもたないのは、それがごく常識的な「アンパン」の（欠片の）(4)ケイショウをなしており、さらに上述のように一回食べても再生産されるものであるからだ。それゆえ、アンパンマンの顔がちぎれても、そしてそれがすぱーっと飛んでいっても、そのこと自身には安心感すらある。イアンパンマンは個別的な存在でありながら、そうであるとはいい切れない。

（檜垣立哉『食べることの哲学』による）

＊

（注）1　NHKのサバンナの映像 ―― この問題文の部分よりも前の箇所で、おなかをすかせたライオンの母子がシマウマを襲い食べる凄惨な映像について語られている。

2　カニバリズム ―― 本来の意味は、人肉を食す行為・習慣のこと。人肉食。

問一　傍線部ア「さらに業の深さを感じさせる」とあるが、どういうことか、説明せよ。

問二　傍線部イ「アンパンマンは個別的な存在でありながら、そうであるとはいい切れない」とあるが、どういうことか、説明せよ。

問三　傍線部(1)〜(4)のカタカナを、漢字に直せ。

(note)

【2】次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

デカルトが四十一歳のときに公刊した『方法序説』をよむと、ごくはじめのところで、われわれは旅というものの効用が申し分なく簡潔に指摘されている次のような一節に出会う。ただし、その効用は、よく文字を弁え、知識として摂受し得るかぎりの知識を時代から申し受けたひとりの若々しい人間にとって、旅が用として働くときの効用である。しかもデカルトは、旅の効用を説きながらも、旅人として長く異郷に暮らすという境涯の孕んでいる危険な罠から、油断のない目を離さない。A旅もまた、この短い一節のうちで相対化されている。デカルトは、同時代のフランスで人々が呼びならわしているところをそのまま用いて、こういう醒めきった目をボン・サンス（良識）と称した。

だが、これまでにギリシア・ラテン語のためには、もう充分の時をついやしたと私は思っていた。このことは、古き世の書物との付き合いについても、そういう書中にみえる歴史また寓話についても、同様にいえることだった。じっさい、別の世紀の人々にしたしむのと、旅をすることとは、よく似ている。いろんな違った国民の習俗について何かを知るのは良いことだ。そうすれば、われわれ自身の習俗について、もっと公平な判断がくだせるようになるし、われわれの風とは相容れないもの、納得しかねるものをすべて見境なく滑稽な、不都合なものに思ったりもしなくなる。何らの見聞もない人々は、そういう思いこみを平気でするものだ。だが、旅にあまりに多くの時を用いすぎると、自分の国に戻ってきても異邦人になってしまう。そして、過ぎし世のことにあまりに打ち興じていると、今の世のことに対してさっぱり不案内な有様になるのはよくあることだ。

（『方法序説』第一部）

右の文中、旅は喩えとして出ているにすぎないように受け取っては、おそらく見当違いになるだろう。しかも、旅は喩えとして働いていないわけでもない。二十三歳以来、折りをみて母国のフランスには「滞在する」のみで、旅に旅をかさねたうえ、『方法序説』出版の一六三七年にはすでに足掛け十年、アムステルダムに居つづけているこの哲学者は、旅宿の暮らしにも、異邦人の立場――しかも二重異邦人の立場――にも、さながら迷宮の支配者のように格別よく事情に通じていた。いいかえれば、喩えのごとくにあしらって傍らをすり抜けてみせるくらいにまで、デカルトは旅とは何かという話題におよぶ段には、みずからの言葉に深く恃むところがあった。

（杉本秀太郎『散文の日本語』による）

問1　傍線部A「旅もまた、この短い一節のうちで相対化されている。」とあるが、旅を相対化するとは、どういうことか、説明せよ。

（補充問題）

問１　傍線部Ａ「旅もまた、この短い一節のうちで相対化されている。」とあるが、旅を相対化するとは、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 旅というものを、フランス人がボン・サンス（良識）と呼びならわしている醒めきった目で見直すことによって、旅の思い出を日常の生活と等価なものとしてとらえること。

② ギリシア・ラテン語などの古い時代の書物やそこに記された歴史と付き合い、別の世紀の人々にしたしむのは、日常生活を離れて異国へ旅に出るのと同じであると考えること。

③ 自分たちの風俗・習慣と相容れないもの、納得しかねるものをすべて見境なく滑稽な、不都合なものに思ったりせず、旅先の目新しい現実をも公平に判断すること。

④ 何らの見聞もない人々は、自分たちの日常生活から逸脱したものを平気で排除してしまう傾向があるが、自分の国に戻っても異邦人にならないためにはそれもやむをえないと考えること。

⑤ 知見を広め人間を成長させるなど、旅の有する意義を認めると同時に、旅に多くの時間をついやして現実から遊離してしまう危険性についても自覚的であること。

問２「かわいい子には旅をさせよ」ということわざは、通常どのような意味で用いられているか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 旅の思い出というものは、美しく懐かしいものであるから、愛する子供には旅をさせるべきである。

② 子供を愛するなら、手もとに置いて甘やかさず、世の中のつらさを経験させて、きびしく育てるべきである。

③ 子供を愛するなら、甘やかすばかりでなく、時には異境への旅を経験させるきびしさが必要である。

④ かわいい子が成長するのを願うのは、親として当然のことであるから、旅の費用を惜しむべきではない。

⑤ かわいい子には、異国への旅ばかりでなく、書物による旅もさせて、学問的に鍛えることも必要である。

(note)

4 評論　読中心〈構文〉②

【1】次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

五年ほど前の夏のことだ。カイロの考古学博物館で私はある小さな経験をした。一人で見学をしていたとき、ふと見ると日本のツアー団体客がガイドの説明に耳を傾けていた。私は足を止め、団体の後ろで何とはなしにその解説を聞いていた。その前にすでに、仕事柄多少は理解できる他の言葉、英語やフランス語で他の国々の団体客向けになされていた解説もそれとなく耳に入っていたから、私にはそれは、ごく自然な、行為ともいえないような行為だった。ところが、日本人のガイドはぴたりと説明を止め、私を指差してこう言ったのだ。「あなたこのグループの人じゃないでしょ。説明を聞く資格はありません！」

要するに、あっちに行けということである。エジプトの博物館で、日本人が日本人に、お前はそこにいる権利はないと言われたのである。そのとき自分がどんな表情をしていたか、われながら見てみたいものだと思う。むっとしていたか、それともきまり悪そうに小さな笑みを浮かべていたか。少なくとも、とっさに日本人でないふりをすることはできなかった。

この状況は、ちょっと考えてみるとなかなか奇妙なものだ。というのも、私がこんな目に遭う危険は、日本以外の国のツアー客に「パラサイト」しているときにはまずありえないからだ。英語やフランス語のガイドたちは自分のグループのそばに「アジア人」が一人たたずんでいても気にも止めないだろう。それに、顧客以外の誰かが自分の説明に耳を傾けていたとして、それがガイドにどんな不都合になるというのか。博物館内の、障壁のない、公的な空間で、自分の言葉を対価を払った人々の耳だけに独占的に届けよう、どんなにおとなしくしていても「たかり」は「たかり」、「盗み聞き」は断固許すまじという使命感。それは空しい使命感にちがいない。日本語の分かる非日本人はいまではどこにでもいるし、私のような顔をしていないかもしれないし、まして私のような反応は、おそらく誰もしないだろうから。

しかし、その日ガイドの「排外神経」の正確な標的になったのは私だった。彼女は私が日本人であることを見切り、見とがめられたのちの私の反応も読んでいた。私は自分の油断を反省した。日本人がこのような状況でこのように振る舞いうることをうっかり忘れていたのである。日本にいるときはこちらもそれなりに張りつめている神経が、外国だからこそ[a]ユルんでいたらしい。日本のなかでは日本人同士種々の集団に分かれてたがいに壁を築く。しかし、ひとたび国外に出れば……。だがそれは、菊の紋章付きの旅券を持つ者の、無意識の、

甘い想定だったようだ。アその「甘さ」において私はまぎれもなく「日本人」だった。「日本人」だったからこそ日本人にパラサイトの現場を押さえられ、追い払われ、そして、逆説的にも、その排除を通じてある種の帰属を確認することを余儀なくされたのである。

この些細でコッケイな場面が、このところ、「ナショナルな空間」というものの縮図のように思えることがある。ときどき考えるのだが、このときの私とガイドを較べた場合、どちらがより「ナショナリスト」と言えるだろう。「同じ日本人なんだからちょっと説明を聞くくらい……」と、「甘えの構造」の「日本人」よろしくどうやら思っていたらしい私の方だろうか。それとも、たとえ日本人でも「よそ者」は目ざとく見つけ容赦なく切り捨てるガイドの方だろうか。確かだと思えるのは、私のような「日本人」ばかりではナショナリズムを「立ち上げる」のは容易ではないだろうということ、日本のナショナリズムは、かつても現在も、このガイドのようにきちんと振る舞える人々を欠かせない人材として要請し、養成してきたに違いないということである。少なくとも可能的に、「国民」の一部を「非国民」として、「獅子身中の虫」として、摘発し、切断し、除去する能力、それなくしてナショナリズムは「外国人」を排除する「力」をわがものにできない。それはどんなナショナリズムにも共通する一般的な構造だが、日本のナショナリズムはこの点で特異な道を歩んでもきた。この数十年のあいだ中流幻想に浸っていた日本人の社会は、いまふたたび、急速に階級に分断されつつある。それにつれてナショナリズムも、ふたたび、イその残忍な顔を、〈外〉と〈内〉とに同時に見せ始めている。

（鵜飼哲「ナショナリズム、その〈彼方〉への隘路」）

〔注〕

○ パラサイト ― 寄生。

○ 菊の紋章付きの旅券 ― 日本国旅券（パスポート）のこと。表紙に菊の紋章が印刷されている。

○「甘えの構造」 ― ここでは、精神分析学者の土居健郎が提唱した著名な日本人論を指す。日本人の心性の大きな特徴として「甘え」の心理を論じた。

問一　「その『甘さ』において私はまぎれもなく『日本人』だった」（傍線部ア）とはどういうことか、説明せよ。

問二　「その残忍な顔を、〈外〉と〈内〉とに同時に見せ始めている」（傍線部イ）とはどういうことか、説明せよ。

問三　傍線部ａのカタカナを、漢字に直せ。

(note)

【2】次の文章は、リービ英雄「『there』のないカリフォルニア」の一節である。著者は、アメリカ合衆国の日本文学研究者である。かつて日本に住んだこともある著者は、それまで勤めていた東海岸のプリンストン大学をやめて、カリフォルニアのスタンフォード大学に移った。以下は、著者がカリフォルニアに移り住んでからの話である。これを読んで、後の問いに答えよ。

四季がはっきりしていることが現実にとっても文学にとっても重要な特徴でありつづけてきた日本から来ても、あるいは、もしかすると近年の日本以上に四季の変化が豊かなアメリカ東海岸から来ても、はじめて体験するカリフォルニアの自然は、実にショッキングなものである。

スプリンクラーを止めたらたちまち砂漠にもどる芝生の上を歩きながら、広々とした、雲一つないコバルト色の空におどろく。最初にその下を歩いた日には、その空にこの惑星のものとは思えないほど「異質」でショッキングな美しさを覚えてしまった。雪と嵐(あらし)が毎年連続する東海岸の厳しい冬から逃げようというかなり単純な動機で、アメリカ人は昔からカリフォルニアに「再移民」していたのである。

コバルト色の空は、一週間いても変わらない。一か月いても同じである。一つの「季節」に相当する時間が経っても、空はぼくが来た日からほとんど何の変化もみせない。

そのカリフォルニアの空に対して、最初はとても快いおどろきを覚えた。空は開放的だった。スタンフォードの空を最初に見上げたとき、はじめて(注1)村上春樹の文章を読んだときのように、単純で明快なグッド・フィーリングを覚えた。

そんなグッド・フィーリングのために、アメリカ人はカリフォルニアに「再移民」するのに違いない。

季節の変化を束縛として感じる人はおそらく、ここで一つのパラダイスを見つけて、その中で自然の一つの「条件」から自らを解放してしまったような気持ちになるだろう、と思った。東海岸の豊かな季節の変化を苦痛と感じる人は、変化のないところに「パラダイス」を見つけるだろうと、思った。

カリフォルニアの空は、その下を歩く人々を「束縛」しない。Aコバルト色の天空は、「文脈」にはならない。季節という「前後関係」を暗示しない。過去も未来もなく、永遠なる「今日」の空。ぼくがカリフォルニアに移動して住んだ一九八〇年代には、雲一つない、広々とした空を、すべてのニュアンスがはがされた、だから意味や解釈などを超越してしまった、最も「現代的」なテキストに見たてようという気持ちさえ起きたのである。

そのような気持ちは、一週間ぐらい残った。一行一行からグッド・フィーリングが滲(にじ)む、ちょっと長い短編小説とか、ちょっと短い中編小説のような、なかなかすばらしい一週間だった。

それから、日本古典文学の授業が始まった。

東海岸のプリンストンでは、季節感の細かい変化を表現の大きな軸の一つにした古代・上代の日本文学を講じることにはあまり違和感がなく、むしろ現代の日本の都市で講じるよりも「自然だ」と思えるときすらあった。

ところが、カリフォルニアに来ると、日本文学の一流の研究家たちが同じ学科にいて、学生のレベルも、プリンストンと同じか、プリンストンよりも高いにもかかわらず、和歌を教えはじめた時点から、窓に映る、きのうも今日も明日も同じコバルト色の空がひどく気になってか、ぼくはつまずいてしまった。『古今集』になるとコッケイな気持ちになって、『枕草子』まで来ると、まわりの現実とテキストのズレによって、心の中は一種のパニック状態になった。

(注2)オクラホマ出身の、九十キロもある(注3)アメフトの選手に、額田王(ぬかたのおおきみ)についての感想を言わせると、「あ、あ、今までは春が好(よ)いと思ったけど、やっぱり秋もバカにできない、と思いました」という「結論」を渋々とのべるが、彼にはそんな実感はまったくなく、「東海岸的(イースト・コースト)」なノイローゼの結果として人間は季節などを問題にしたに過ぎない、と考えているのも明らかだ。

ましてや「冬」とか「雪景色」になると、そんなものはヨーロッパとかボストンにいた(ア)ソセンたちが悩まされて、カリフォルニアにいる自分たちが卒業してしまったテーマだ、という態度が、日焼けして色白が一人もいない白人の生徒たちから伝わってくるのである。

春はあけぼの？　いいえ、毎日はあけぼの、年中はあけぼの。B俺たちにとっては、季節の区別なんて、歴史の領域なんだ。

『(注4)歴史の終わり』の著者が、カリフォルニアの(注5)シンク・タンクの研究員となったことは、不思議でも何でもない。共産主義の崩壊の前の時代にも、カリフォルニアの学生たちはすでに「歴史の終わり」を生きていた、あるいはそんな思いこみをさせてくれる環境の中で生きていたことは確かである。

(注6)秋山そ我(あれ)は

春の景色と秋の景色を比べた額田王の、細かい「季節比較」の結論の日本語を「The autumn

hills are for me」と英訳して朗読するぼくの声が、だんだん弱々しくなって、「カルチャー・ショック」より(イ)シンコクな、一つの虚無感を覚えてしまった。

どこでもいいから、四季のある「ノーマル」な国にもどりたくなったのである。

(注) 1 村上春樹 ―― 小説家(一九四九～)。作品に『風の歌を聴け』『羊をめぐる冒険』などがある。
2 オクラホマ ―― アメリカ合衆国中南部の州。
3 アメフト ―― アメリカンフットボールの略。
4 『歴史の終わり』―― アメリカの政治学者F・フクヤマ(一九五二～)の著書。一九九二年に発表された。
5 シンク・タンク ―― 研究開発を行う専門家を集めた頭脳集団。
6 秋山そ我は ―― 『万葉集』巻一に収められた額田王の長歌の末尾。

問一 傍線部(ア)(イ)のカタカナを漢字になおせ。

問二 傍線部A「コバルト色の天空は、『文脈』にはならない」とあるが、どういうことか、説明せよ。

問三 傍線部B「俺たちにとっては、季節の区別なんて、歴史の領域なんだ」とあるが、どういう意味か、説明せよ。

（補充問題）

問２　傍線部Ａ「コバルト色の天空は、『文脈』にはならない」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の ①～ ⑤のうちから一 つ選べ。

① カリフォルニアの常にコバルト色をした空の下では、季節の変化がある土地に生まれた文学作品の筋や論旨を正しく解釈できないということ。

② 地球のものとは思えないほど「異質」な印象を与えるカリフォルニアの空は、人間の地上の営みの意味を鮮明に浮かび上がらせる背景とはならないということ。

③ どこまでも明るいカリフォルニアの空には、自然現象と文学作品が脈絡のある関係を結んでいると認識させるものはないということ。

④ 雲一つなく晴れ渡ったカリフォルニアの空は、人間の言葉を寄せ付けないので、筋道の整った文章表現の中に取り込めないということ。

⑤ 季節の変化がないカリフォルニアの空の下では、四季の変化が人間の生活と織り成して作る時間の推移を、他の土地でのようには感じられないということ。

問３　傍線部Ｂ「俺たちにとっては、季節の区別なんて、歴史の領域なんだ」とあるが、それはどういう意味か。その説明として最も適当なものを、次の ①～ ⑤のうちから一つ選べ。

① 季節の区別は、かつて人間が季節の変化に病的に反応した結果意識された問題であり、すでにそうした病から癒やされているわたしたち現代人にとっては、それはただ、歴史的関心の対象にすぎない。

② 季節の変化のある土地の人々は、今でも季節の問題に悩まされているが、カリフォルニアではすでにそれについての判断が確定しており、カリフォルニアに現在生きている自分たちには「卒業」済みの問題にすぎない。

③ 季節の変化のある土地の人々は、季節の区別に古くからとらわれてきたが、カリフォルニアに生きる自分たちは、そうした思考があることを知っていても、それは実感をともなった今の問題にはなりにくい。

④ 季節の区別の問題は、東海岸の厳しい冬を体験している自分たちには、依然としてやはり重要なテーマであるが、すでに「歴史の終わり」を生きているカリフォルニアの学生たちにとっては興味を引くものではない。

⑤ 季節の区別についての評価は、過去の文学作品が精力的に取り組んですでにおおよその共通理解が出来上がっているので、現代世界に生きるわたしたちがいまさら議論する価値のある問題ではない。

5　文学的文章　共通テスト対策

【1】次の文章は、加藤幸子の小説「海辺暮らし」の一節である。漁師であった夫に先立たれたお治婆さん（元木治）は、他の土地に住む娘夫婦の同居の誘いを断り、夫が漁業権を手放した際に得た補償金の残金を元手に、干潟に遊びに来る客を相手にした駄菓子屋を一人で営んでいる。これを読んで、後の問いに答えよ。

店に続く四畳半は、風の通り道である。海の匂いが満ちていて、貝殻にもぐりこんだ宿借りの心境が分ってくる。お治婆さんがうたた寝をしているところへ《コーガイさん》が訪ねてきた。お治婆さんは慌てて起きあがり、一枚だけの客用座布団の上へ招じ入れた。市役所からは月一度の割りで、だれかが訪問にくる。水質調査の名目だが、お治婆さんの体と気持が弱って、家を手放すつもりになってはいまいか偵察するためである。その意図を承知の上で、お治婆さんは《コーガイさん》の訪問を楽しみにしている。

今回は初対面の人だった。先月までは停年間近の(注1)白皙の紳士で、結構話が弾んだものだった。新しい訪問者は、アニメのロボットみたいに顔も肩も胴体も四角ばっている。

「公害課の梶と申します」

傍らに採集した海水の広口瓶をていねいに立ててから、名刺をお治婆さんに差し出した。訪問先が、まれにみる(注2)陋屋であることにびくともした様子はない。お治婆さんはちょっと感心した。(注3)ルルは初めて会う人物を特に念入りに調べる癖があるので、梶氏の前に坐って動こうとしない。そのためまるで猫に向かって、お辞儀をしているように見える。

「元木さんのことは、前任の平田からよくうかがっております」

「前の方は、どうされましたか？」

「県庁のほうへ栄転してゆかれました」

「まあ、それはよかったですこと」

お治婆さんは、梶氏を（ア）つくづくと眺めた。壮健そうな働き盛りである。A教育のしがいもあるというものだ。

「そうそう」お治婆さんは急に思い出した。

「前の方は、よく浅蜊の佃煮を召しあがっていかれました」

(注4)蠅帳を開けて佃煮の小皿を取り出すと、冷えた(注5)麦湯とともに梶氏にすすめた。

「こういうものが、お口に合うかどうか……」

5　10　15　20

「あ、これは、どうも」相手は恐縮した。「ぼくの大好物ですよ。母の料理は和風でしたのでね。頂きます」

行儀よく梶氏は三個の浅蜊を口へ運ぶと、首をかしげて言った。

「とてもいいお味ですな。最近、佃煮の製造法が画一的になってしまいましたが、これは一味ちがう。(注6)酒悦ですか、それとも貝新?」

「あら、いやだ」お治婆さんは、頬を染めた。

「あたしが作ったんですよ。この前で掘った浅蜊で」

《市役所》はすとんと箸を戻し、その拍子に畳に転げた一個にルルが飛びついた。

「ここの貝なんですか、ここの干潟の……」

声がかなり上ずっている。

「そうですとも」お治婆さんは力をこめて言った。「ここの浅蜊はよく太って汁気が多いので、おだしがよく出ますよ。たまには(注7)稚児蟹も集めて煮ますけれど、あれはいがいがして口当りが悪いんですの。でもカルシーウムがいっぱいありますからね、蟹の甲羅には」

風が急いで通り抜け、お治婆さんの短い白髪が総毛立った。梶氏は坐り直すと、緊張の面持で言った。

「ごぞんじないんですか。この干潟の水の測定値は(注8)BOD14PPMです」

「はいはい、前の方もそのように言われていましたよ」

「とても汚れているという証拠です」

「でもこういうお水のほうが、浅蜊や牡蠣はよく肥えますわ」

「そればかりじゃありませんよ」

梶氏は(イ)躍起になって言った。

「川向うの埋立地に工場がびっしり建っているでしょうが」

「ええ、ええ。毎日きれいな煙を吐いて……まるで七色鉛筆のよう」

「呑気なことを言わないでください。あれはみな悪い煙や廃水を出すので、住宅地から追い出されてきた工場です」

「……」

初めて老婆が沈黙したので、梶氏は調子に乗ってたたみかけた。

「廃水には、いろいろの化学物質が混じっているのです。だからそれを吸いこんでいる貝なども食べないほうがいいのです」

「おや、まあ」

お治婆さんは(ウ)頓狂な声で叫んだ。

「この貝にもドクが入っているのですか」震える指で、彼女は佃煮の小皿を差した。「どうしましょう。あたしの責任だわ」

「え？」

「だって日曜祭日には、何百人っていう町の人たちが貝掘りに来るんですもの。今日だってほら、子どもたちがあんなに夢中になって……。さっそく立札を立てなくっちゃ。『工場からドクが出ています。貝を採らないでください』って。ここはあたしの干潟ですもの……、もう間にあわないかも知れないけれど、でも知った以上は……」

B新任の《市役所》の顔色が変わった。

「そんなこと、まったく必要ありませんよ、おばあちゃん。こうやって毎月厳重に検査を実施しているのは、そのためなんですから。基準値を超えることはめったにないのです。ただ、気分の問題で……」

「おや、そうでしたか」お治婆さんはにっこりした。「気分なら、今のところ上々ですわ」

「そうでしょうとも」

「さあさあ、ドクでないことが分ったのですから、もう少しおつまみくださいませ。佃煮の好きな方に巡り会って、ほんとうに嬉しいですわ」

梶氏は仕方なく小皿に箸を近づけて、数個の浅蜊を麦湯で流しこんだ。この苦役が終ると、彼はある決心の色を浮かべて、お治婆さんに向き直ったのである。

「さて、元木治さん」

「はい」お治婆さんは小首をかしげて、素直な生徒みたいに返事をした。

「来年度の市の計画では、この干潟を埋め立ててゴミ処理場を建設することになっています」

お治婆さんの首の傾斜は、ますます深くなった。

「だから元木さんには、本年中にぜひここを引き払っていただきたいのですよ」

お治婆さんは麦湯を啜って、かすかに笑みを浮かべた。

「もちろん最大の補償をさせていただきます。引っ越しの費用も労働力も、私どもで提供いたします」

少し疑いを生じながら、梶氏は続けた。お治婆さんは相手の口もとをじっと見つめていながら、何の反応も表明しなかった。

「ゴ・メ・ン・ナ・サ・イ・ネ」

梶氏は周囲を見まわした。彼はこの金属的な音声が、目の前の老婆から発せられたことを信じることができなかったのである。

「ゼンゼン聞コエナクナリマシタ」

「は？」

「トキドキ耳ガ、遠イトコロニ行ッテシマウノデス。Cアナタノ楽シイオ話ヲモット聞キタイノデスガ、残念デス。耳ハタ方ニハ戻リマス。良カッタラソレマデココデオ待チクダサイマセ」

市の意向を伝えようとする虚しい努力の末に、梶氏は落胆しきって立ちあがった。お治婆さんはその前に立ちふさがった。そして一本の棒キャンデーを差し出したのである。

「今日ハトテモ暑イノデ、町ヘノ道々、コレデ口ノ中ヲ冷ヤシテオ帰リクダサイマセ」

《市役所》が肩を落として帰っていく様を、お治婆さんとルルは並んで見送った。梶氏は、もらったキャンデーを舐めるために、ときどき立ち止まった。そうしなければ、たぶん溶けたキャンデーは掌からズボンに滴り落ちて、染みをつくる原因になったであろう。

（注）

1 白皙――色白なこと。

2 陋屋――狭くてみすぼらしい家。

3 ルル――お治婆さんが飼っている猫の名。

4 蠅帳――蠅などが入らないように金網などを張ってある、食物を入れるための戸棚。

5 麦湯――麦茶のこと。

6 酒悦・貝新――いずれも佃煮の老舗の名。

7 稚児蟹――スナガニ科の小型の蟹。体長一センチ程度で、河口の干潟などに群れをなして生息している。

8 BOD――生物化学的酸素要求量。有機物による水質汚染の度合いを表す指標に用いられる。

問1　傍線部(ア)～(ウ)の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

(ア)　つくづくと

① 興味を持ってぶしつけに
② ゆっくりと物静かに
③ 見くだすようにじろじろと
④ 注意深くじっくりと
⑤ なんとなくいぶかしげに

(イ)　躍起になって

① 夢中になって
② さとすように
③ 威圧するように
④ あきれたように
⑤ むきになって

(ウ)　頓狂な声

① びっくりして気を失いそうな声
② あわてて調子はずれになっている声
③ ことさらに深刻さを装った声
④ とっさに怒りをごまかそうとした声
⑤ 失望してうちひしがれたような声

問2　傍線部A「教育のしがいもあるというものだ」とあるが、このときのお治婆さんの心情はどのようなものか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 初対面の自分にも丁寧なあいさつをする梶氏を実直だが真面目過ぎる人だと思い、現実にはそれほど簡単に物事が運ばないことを思い知らせてやろうと手ぐすねを引いている。

② 初めて見るであろう陋屋にも全く物怖じする様子を見せない梶氏を骨のある役人だと思い、立ち退きを求めるためには役人としてどう振る舞えばよいかをわからせてやろうと意気込んでいる。

③ 広口瓶をていねいに立てる梶氏の几帳面なしぐさから梶氏を信頼できる人だと思い、この人になら人々の遊び場となっている干潟の価値を認めさせることができるのではないかと期待している。

④ 初めての訪問にもかかわらず臆する気配を見せない様子から梶氏を頑強そうな人だと思い、役所の言いなりにはならないこちらの対応のしかたを知らしめる相手として不足はないと楽しみにしている。

⑤ 物言いや態度から役人としての能力の高さが認められる梶氏を実行力も伴った人だと思い、家を手放すつもりはないという自分の考えを役所に理解させることができるはずだと奮い立っている。

問3　傍線部Ｂ「新任の《市役所》の顔色が変わった」とあるが、それはなぜか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 勢いこんで口にした、工場から出される煙や水に注意を促した言葉が、工場からドクが出ていると書かれた立札を実際に立てる行動にお治婆さんを誘いかねない事態になったことに驚き、うろたえたから。

② 工場から出る煙や水の汚染は厳重な検査をしているので実際は問題にならないという主張を無視して、工場のドクについての立札を立てるというお治婆さんの行動があまりにも独善的なので、びっくりしてしまったから。

③ 工場から出ているドクに対して無頓着（むとんじゃく）なお治婆さんにドクの危険性を説明していたが、思いがけなくお治婆さんが取り乱してしまったので責任を感じ、工場の害を強調し過ぎたことを取りつくろおうと焦ったから。

④ 市の意向に逆らい続けるお治婆さんを警戒して訪問すると、気さくに浅蜊の佃煮を勧めてくれる親切な人柄に心を許し始めたのだが、干潟を自分の土地であるかのように言うので、そのずうずうしさに憤りを覚えたから。

⑤ 工場の危険性を説明して干潟から立ち退いてくれるよう説得に来ただけなのに、お治婆さんに町の人たちが採る貝にドクが入っていると思い込ませてしまい、良心の呵責（かしゃく）を感じさせてしまったことを気の毒に感じたから。

問4　傍線部C「アナタノ楽シイオ話ヲモット聞キタイノデスガ、残念デス」とあるが、この部分の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 文字通りには、体の変調によって梶氏との会話を中断したことをお治婆さんが悔やむ言葉であるが、梶氏を責める気持ちが表されており、市役所の担当者と対等に渡り合おうとするお治婆さんの気丈さがうかがわれる。

② 文字通りには、体の変調から会話が続けられないことをお治婆さんが心から梶氏に訴える言葉であるが、市役所の担当者とかかわり合うことを諦（あきら）める気持ちが表れており、梶氏を教育する気力が失せていることがうかがわれる。

③ 文字通りには、体の変調が起こったお治婆さんが会話の中断を申し出る形式的な言葉であるが、話を続けられなくなった切ない心情が隠されており、会話を介して孤独な思いを解消しようと願っていることがうかがわれる。

④ 文字通りには、お治婆さんが体の変調を感じ梶氏との会話を続けられなくなったことを惜しむ言葉であるが、市役所の担当者に対する皮肉が込められており、梶氏をやりすごそうとするお治婆さんの賢さがうかがわれる。

⑤ 文字通りには、お治婆さんが体の変調により梶氏の楽しい話を聞けなくなったことを謝る言葉であるが、空空しい言い方であり、そもそも梶氏とは会話を交わしたくなかったお治婆さんの本音がうかがわれる。

問５　この文章中の叙述に対する説明として適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。ただし、解答の順序は問わない。

①　８行目の「新しい訪問者は、アニメのロボットみたいに顔も肩も胴体も四角ばっている」は、梶氏の体型の描写であるとともに、梶氏が立派な体格をしたヒーロー的な存在であることも明らかにしている。

②　３１行目の「《市役所》」は、梶氏を勤め先の名称によって指し示す擬人法であり、梶氏が「市役所」を代表して公害対策に日々奔走する役人であることを強調している。

③　６３行目の「おばあちゃん」という呼び方が７２行目の「元木治さん」に変わったことは、市側の意向を伝達するために、梶氏が会話におけるふたりの関係性を変化させ、自らの公的な立場を明確にしたことを示している。

④　９４行目の「《市役所》が肩を落として帰っていく様を、お治婆さんとルルは並んで見送った」という描写は、梶氏が責めを負わせられる側であり、お治婆さんが責める側であるという関係を具体的に示している。

(note)

【2】次の文章は、三浦哲郎の小説「まばたき」の一部である。これを読んで、後の問いに答えよ。

旧友は、なにかひどく驚いたようなまるい目を天井へ向けたまま、荒い呼吸を繰り返していた。けれども、病室の天井はただ薄汚れているだけで、寝ている病人を驚かすものなどあるはずがない。

見ていると、旧友の目は、嵌(は)め込まれたガラス玉のように全く動かなかった。じきに、その目がまるく見ひらかれているだけで、実はなにも見てはいないのだとわかった。顔を寄せても、なんの反応もなかった。

「どうしたんだろう。」

「中(あた)りゃんしてなす、テレビの相撲を観(み)ているうちに。」

彼を呼びにきた旧友の細君がいった。彼の故郷であるこのあたりでは、(注1)中風(ちゅうぶう)のたぐいで倒れることを(ア)おしなべて〈中(あた)る〉といっている。そういえば、この男は高校のころ相撲部にいたな、と彼は思い出した。

「意識は戻ってないみたいですね。」

「いいえ。」と細君はかぶりを振った。「先生もそうおっしゃいますけんど、おらはなんぼか戻ってると思うておりゃんす。」

それから細君は、ためしに亭主へ声をかけてみてくれないかといった。彼は旧友の名を呼んでみた。すると、どういう刺激のせいなのか、旧友は、まばたきを一つした。たったいちどだけだったが、まるで音がするような強いまばたきであった。

細君は、胸の前で勢いよく両手を組み合わせ、狂喜の面持ちで彼を見た。

「ほれ、いま、まばたきしゃんしたえ。これは、あんたさんのお声がわかったという証拠でやんす。父ちゃんは、目で返事したんでやんすよ。」

彼はもういちど旧友の名を呼んでみたい誘惑に駆られたが、A細君を困惑させることになっては気の毒だと思って、よしにした。細君は、彼の声にわずかながら反応を示したこの機を逃がすまいとするように、亭主の耳に口を寄せて熱心に語りかけていた。

ここは泌尿器科の病室で、入院が長引きそうなので空室の多いこの病棟へ移されたのだが、驚いたことに、偶然、隣室に高校時代の思い出話によく出てくる級友のひとりが(注2)虫垂炎をこじらせて入院していて、看護婦に確かめてから挨拶(あいさつ)に伺ったついでに、こちらの様子を

見にきて頂いた――そんなことを細君は話して聞かせてから、主人はあなたのお声を耳にしてさぞかし意外に思っていることでしょう、といった。

「意外なのは、こちらもおなじです。」

と彼はいった。

まさか、こんなところで、寝台の上に肥満した四肢を投げ出して仰臥したまま泥人形のように微動だにしない旧友と再会することになるとは思わなかったのだ。

「あんたさんも運の悪いこってしたなあ。」

細君は（イ）眉をひそめて気の毒そうに彼を見た。郷里を出て、もう三十年越し東京暮らしをしている彼が、たまたま休暇をとって帰省中に、しかも人里離れた鉱泉宿で発病してあやうく手遅れになりかけた不運を、口の軽い看護婦からでも聞き出したのだろう。

「ひどい目に遭いました。いつ、なにが起こるか、わからんもんですな。」

彼がそういったとき、不意に細君が小娘のような声を挙げて彼の寝衣の袖口を摑んだ。

「いま、ごらんになりゃんした？　また、父ちゃん。まばたきしゃんした。きっと、おら共の話を聞いてたんでやんしょう。それで、あんたさんの言葉に共感の合図を送ったんでやんす。」

そのまばたきを見損なった彼は、返事に窮して、枕の上の随分大きく見える旧友の赤ら顔を、黙って眺めた。相変わらず、ガラス玉のような目が飛び出しそうに天井を仰いだまま動かない。細君が我にかえって、摑んでいた彼の寝衣の袖口を（ウ）どぎまぎと放したのをしおに、お大事に、と彼は頭を下げて旧友の病室を出た。

隣には、見舞客の気配もなく、時折、細君のぼやくような独り言と、医師や看護婦になにか訴えるような声が、壁越しに低くきこえるぐらいで、一日の大部分の時間は空室のようにひっそりとしていた。夜ふけには、単独の鼾がきこえた。もはや旧友には昼夜の別がないのだから、鼾は夜眠る習慣を守りつづけている細君のものだと思われた。この病院は完全看護なのだが、隣室では細君が泊り込みで病人に付き添っているらしい。

東京で暮らすようになってから、郷里とはすっかり疎遠になって、もはや呼吸とまばたきしかしなくなっている旧友のその後についても全く知るところがなかったのだが、耳ざとい看護婦によれば、旧友は長年教職にあって、いまは郷里と浜つづきの小都市の教育委員会で主事を務めている由であった。

隣室の旧友を見舞ってから数日して、彼の主治医が退院の相談に病室まできてくれた。彼は、必要な話が済んでから、医師に旧友の容態について尋ねてみた。医師は、自分の担当ではないからと口籠(くちごも)りながら、手術さえ可能なら希望が持てるのだが、といった。

「患部がきわめて厄介なところにあるらしくてね。脳外科の連中も手を出したがらないのです。」

「すると、彼はずっとあのままですか。」

「心臓が堪えられるならね。お気の毒なことですが。」

「時々、まばたきをしますね。」

医師は目を伏せてうなずいた。

「奥さんがそれに希望を託してたな、意識のある証拠だといって。」

医師はしばらく黙っていたが、やがて、

「でも、それでいいのじゃないでしょうか。そう信じられて、希望が持てるんだったら。私らはその希望をわざわざ打ち毀(こわ)すようなことはしないのです。」

と顔を上げていった。

退院の朝、彼は隣室へ別れをいいにいった。ところが、細君の姿は見えなくて、旧友だけが初めて見舞ったときとほとんどおなじ様子で病床にいた。彼は、戸口でちょっと躊躇(ためら)ったが、B無人にも等しい病室の素っ気なさが彼を大胆にした。彼は、旧友の枕許(まくらもと)までいくと、

「じゃ、お先にな。ねばれるだけ、ねばれよ。相撲の選手だったころみたいにな。」

と盆のような顔を見下ろしていった。

すこし待ってみても、旧友はまばたきをしなかったが、気のせいか、その目がすこし潤んだように見えた。

(注)　1　中風 ―― 脳出血などによって起こる半身不随、手足の麻痺(まひ)などの症状をいう。「ちゅうふう」「ちゅうぶ」ともいう。

2　虫垂炎 ―― 盲腸のさきにある虫垂の炎症。盲腸炎ともいう。

問1　傍線部(ア)～(ウ)の表現の本文中における意味内容として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

(ア)　おしなべて

① ぼかして
② 推し量って
③ 隠して
④ 総じて
⑤ ひらたく言って

(イ)　眉をひそめて

① 不吉に思い、眉をしかめて
② 心を痛め、眉間(みけん)に皺(しわ)を寄せて
③ 眉を下げ、冷静を装って
④ 眉間を緩め、理解を示して
⑤ 嘆きながら、眉をゆがめて

(ウ)　どぎまぎと

① 恥ずかしさのあまり、思わずとりみだして
② とっさに弁解できず、しどろもどろで
③ 相手に理解してもらえず、困惑して
④ 不意をつかれて、たじろいで
⑤ 思いがけない行動をしていたことに、うろたえて

問２　傍線部Ａ「細君を困惑させることになっては気の毒だと思って、よしにした」とあるが、それはなぜか。その理由の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 夫のまばたきに意識の回復の兆しをみようとする細君を見ていると、動揺しているのはよくわかるのだが、それを露骨に指摘しては、献身的に看病している細君に失礼だと思ったから。

② 夫がまばたきをしたことに狂喜している細君を目の前にして、いまはともかく気が動転している彼女の気持ちを落ち着かせることが先決で、むやみに刺激してはいけないと思ったから。

③ 自分自身に言い聞かせるように、夫の復調への希望を主張する細君の前で、もう一度旧友の名を呼んで、その生死を確かめるのは、軽率な行為になってしまうと思ったから。

④ 夫は偶然まばたきをしたのではなく、自分の意思によって反応したとみなして、そこに一縷（いちる）の望みを託そうとする細君の気持ちに水をさしてはいけないと思ったから。

⑤ 自分を偽ってまで夫のまばたきに期待を託そうとする細君を見ていると、何の反応もないとわかっているのに、旧友の名を呼んで細君を傷つけるわけにはいかないと思ったから。

問３　傍線部Ｂ「無人にも等しい病室の素っ気なさが彼を大胆にした」とあるが、この場面における「彼」の心情の動きを説明したものとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① あれこれ話しかけてくる細君に注意を払わなくてもいいので気持ちが楽になり、寝台の上で微動だにしない旧友の姿を勇気をもって見極められるようになった。

② 生きている人間の気配さえ消えた病室の中で二人きりになってみると、知らず知らずのうちにお互いが若かった頃（ころ）のことが思い出され、少年の頃の遠慮のない率直な気持ちになった。

③ 静まりかえった病室の中で二人きりになったとき、はじめて、直（じか）に旧友と向き合い、誰にもはばからずに語りかけることができるようになった。

④ 生きているのかどうかも分からない旧友が病室の中にぽつんと取り残されている姿を目の当たりにして、人間のはかない運命をたじろがずに受け入れられるようになった。

⑤ 意識を失って昏睡（こんすい）している旧友が横たわる病室の静けさに触れ、思い切って最期の別れを言っておかなければならないのではないかという切迫した気持ちになった。

(note)

6　文学的文章　〈歌論〉

次の文章は歌人の河野裕子の随筆「ひとり遊び」で、文中に挿入されている短歌もすべて筆者の自作である。これを読んで、後の設問に答えよ。

熱中、夢中、脇目もふらない懸命さ、ということが好きである。

下の子が三歳で、ハサミを使い始めたばかりの頃のことである。晩秋の夕ぐれのことで部屋はもううす暗かった。四畳半の部屋中に新聞紙の切りくずが散乱し、もう随分長いこと、シャキシャキというハサミを使う音ばかりがしていた。下の子は、切りくずの中に埋まって、指先だけでなく身体ごとハサミを使っていた。道具ではなくて、ハサミが身体の一部のようにも見えた。自分のたてるハサミの音のリズムといっしょに呼吸しながら、ただただ一心に紙を切っているのである。呼んでも振り向く様子ではなかった。熟中。胸を衝かれた。私は黙って障子を閉めることにした。夕飯は遅らせていい。

このようなことは、日常の突出点などでは決してなく、むしろ子供にとってはあたりまえのことなのではないだろうか。大人の側が、それを見過ごしているのである。大人たちは、子供の熱中して遊ぶ姿にふと気づくことがある。そして胸を衝かれたりもするのである。

しかし、と私は思う。大人の私が、子供たちが前後を忘れて夢中になって遊ぶ姿を、ままに見落としているにしても、当節の、すこしも遊ばなくなった、といわれる子供たちに較べれば格段によく遊ぶうちの子供たちにしても、私自身の子供時代に較べれば、やはり今の子供たちは、遊びへの熱意が希薄なように思われてならないのである。

子供時代に遊んだ遊びを思い出す。罐蹴り、影ふみ、輪まわし、石蹴り、砂ぞり遊び、鬼ごっこ、花いちもんめ、下駄かくし、数えあげればきりもない。これらはいずれも多くの仲間たちと群れをなして遊んだ遊びである。集団の熱気に統べられて遊んだ快い興奮を忘れることができない。

より多く思い出すのは、ひとり遊びのあれこれである。私が真に熱中して遊んだのは、ひとり遊びの時だったからである。集団遊びの場合は、何何遊びとか、何何ごっこと、れっきとした名前がついているのに、ひとり遊びは、ひとり遊びとしか言いようがない。よそ目には何をしているふうにも見えないが、その子供には結構楽しい遊びであることが多いからである。

しらかみに大き楕円を描きし子は楕円に入りてひとり遊びす（『桜森』）

おそらく子供は、ひとり遊びを通じて、ィそれまで自分の周囲のみが仄かに明るいとだけしか感じられなかった得体の知れない、暗い大きな世界との、初めての出逢いを果たすのであろう。世界といってしまっては、あまりに漠然と、大づかみに過ぎるというなら、人間と自然に関わる諸々の事物事象との、なまみの身体まるごとの感受の仕方ということである。その時の、鮮烈な傷のような痛みを伴った印象は、生涯を通じて消えることはない。生涯に何百度サルピアの緋を愛でようとも、幼い日に見た、あの鮮紅には到底及ぶものではないのと同じように。

ひとり遊びとは、自分の内部に没頭するという以上に、対象への没頭なのであろうと思う。川底の小蟹を小半日見ていてなお飽きない、というようなことがよくあった。時間を忘れ、周囲を忘れ、一枚の柿の葉をいじったり、雨あがりのなまあったかい水たまりを裸足でかきまわしたり、際限もなく砂絵を描いたりするのが子供は好きなのである。なぜかわからない。けれどそれらは何と深い、他に較べようもないよろこびだったことだろう。

菜の花かのいちめんの菜の花にひがな隠れて鬼を待ちゐき

ゥ鬼なることのひとり鬼待つことのひとりしんしんと菜の花畑なのはなのはな

（『ひるがほ』）

菜の花畑でかくれんぼをしたことがあった。薬の花畑は、子供の鬼には余りに広すぎた。七歳の子供の探索能力を超えていたのである。私は鬼を待っていた。もう何十分も何時間も待っていたのだった。持つことにすら熱中できた子供時代。今始まったばかりの子供時代の、ゆっくりゆっくり動いてゆく時間に身を浸しているという、識閾にすらのぼらない充足感があったにちがいない。時代もまたそのように大どかに動く時間の中にたしかに呼吸していたのである。今日のように、自然性を分断された風景というものはなかった。大きな風景の中に、人間も生きていられたのである。薬の花畑のむこうにれんげ畑、れんげ畑のむこうに麦畑があり、それらは遠くの山のすそまで広がっているはずだった。

子供時代が終わり、少女期が過ぎ、大人になってからも、ェずっと私はひとり遊びの世界

の住人であった。何かひとつのことに熱中し、心の力を傾けていないと、自分が不安で落着かなかった。こうした私の性癖は、生き方の基本姿勢をも次第に決定して行ったようである。考え、計算しているより先に、ひたぶるに、一心に、暴力的に対象にぶつかって行く。幸か不幸か、現在の私は、実人生でよりも、歌作りの上で、はるかに強く意識的に、このことを実践している。歌作りの現場は、意志と体力と集中力が勝負である。歌作りとは、力業である。しかし一首の歌のために幾晩徹夜して励んだとしても、よそ目には遊びとしか見えないだろう。然(しか)り、と私は答えよう。一見役に立たないもの、無駄なもの、何でもないものの中に値を見つけ出しそれに熱中する。ひとり遊びの本領である。

（『たったこれだけの家族』）

問一　「私は黙って障子を閉めることにした」（傍線部ア）のはなぜか、考えられる理由を述べよ。

問二　「それまで自分の周囲のみが仄(ほの)かに明るいとだけしか感じられなかった得体の知れない、暗い大きな世界との、初めての出逢いを果たす」（傍線部イ）とはどういうことか、説明せよ。

問三　文中の短歌「鬼なることのひとり鬼待つことのひとりしんしんと菜の花畑なのはなのはな」（傍線部ウ）に表現された情景を、簡潔に説明せよ。

問四　「ずっと私はひとり遊びの世界の住人であった」（傍線部エ）とはどういうことか、説明せよ。

(note)

Features
夏のポイントチェック

❶ 066 【1】高階秀爾「近代美術における伝統と創造」
068 【2】土屋賢二『猫とロボットとモーツァルト』
❷ 072 【1】河合隼雄「人間科学の可能性」
076 【2】鷲田清一「『大人』になれない社会？」
❸ 080 【1】種村季弘「器具としての肉体」
082 【2】前田秀樹『深さ、記号』
❹ 084 【1】黒井千次 「庭の男」
096 【2】井上荒野「キュウリいろいろ」

夏のポイントチェック❶

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

「画家は窓を通して自然を見るのではない。先輩や師匠の作品を通して見るのだ」といったのは、美術史家として、また批評家として有名なイタリアの故リオネルロ・ヴェントゥーリである。美術の全歴史は、おそらくヴェントゥーリのこの一句のなかに、集約的に表現されている。むろん、この場合、「見る」ということは、絵画の表現様式の比喩であるばかりでなく、文字通り視覚的映像世界をも意味する。(1)人は「見る」ことすらも学ぶものである。逆にいえば、人は「先輩や師匠」がそう見たようにしか見ることはできない。われわれは、自分の家の窓から遠く広がる自然の景観を眼(ま)のあたりにする時、いわば嬰児(えいじ)のような捉われない眼で、ありのままに見ていると信じている。だがもしほんとうに嬰児の眼に写る世界をそのまま白日のもとにさらけ出すことができたとしたら、そこにはおそらくただ混沌しかないであろう。その混沌に秩序をあたえ、対象を明確に認識させるのは、ほかならぬ「先輩や師匠」たちの「眼」なのである。

絵画の世界において、ある表現様式がつねに固定して継続する傾向があるのは、そのためである。古代エジプト人たちは、ほとんど三千年ものあいだ、顔と下半身は横向きで上半身は正面向きという、われわれから見れば不自然な人間像を描き続けた。しかもその横顔には、ご丁寧に正面から見た眼が描かれているのである。エジプト人たちのこのような「不自然な」人間表現を、彼らの技術的未熟さのせいにするのはかならずしもあたらない。動物たちを描き出す時の彼らの写実的表現力は、その後の美術史上のどのような作品とくらべてもひけをとらないくらい見事なものだからである。とすれば、彼らが表面視と側面視とをごちゃまぜにしたような人間像を描いたのは、技術が拙劣だったからではなくて、事実そのように人間を「見て」いたからである。そして三千年もの長いあいだそのように「見て」いたのは、彼らがいずれも「先輩や師匠」たちの作品を通して人間を見ることを学んだからである。エジプト人たちのあの様式化された人間像は、(2)実はそれなりにきわめて写実的なものだったといってもよいのである。

（高階秀爾「近代美術における伝統と創造」より）

問一　傍線部（1）「人は「見る」ことすらも学ぶものである」というのはどのような意味か、説明せよ。

問二　傍線部（2）「実はそれなりにきわめて写実的なものだったといってもよいのである」というのはなぜか、その理由を説明せよ。

※解答枠は、すべて4行

【2】次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

変形によって芸術のすべてが説明できる、とは言えなくても、芸術的創造が先行するものの変形を重要な要素として含むことは疑いがない。このことから、いくつかのことが帰結する。

芸術の創造が先行するものから出発してそれを変形するのであれば、芸術のスタイルが変化するのは必然的である。この点で芸術は科学と異なっている。

科学の場合でも変化というものはあるし、その変化は、客観的真理への接近といったものではなく、(注)クーンのいうパラダイム・チェンジといった性格をもつものかもしれない。しかし、科学の場合は変化する必然性はないように思われる。もし科学がその目標に到達して、すべてをきれいに説明できるような日がくれば、そこからさらに変化していかなければならないという理由はない。科学の場合、変化は、まだ目標に達していないことのしるしである。しかし芸術の場合、変化は未完成のしるしではないし、いつの日にか変化しないような状態に到達するわけでもない。

もしバッハが偉大で（たしかに偉大である）、完璧（かんぺき）な曲を作った（実際、完璧と思わずにはいられない。訂正の余地がないように思えるのだから）のだとすれば、人類はそれ以降の作曲家を必要とせず、バッハも完璧な曲を作った後は作曲をやめたとしてもよさそうなものである。しかし実際には、どの芸術家も作品を作れるかぎり作り続けるのであり、芸術家はつぎからつぎに登場するのである。これは芸術全般にみられる基本的事実である。アどんなに「完璧な作品」を作っても、それで終わりということにはならないのである。

芸術のたどる変化は、服装などの流行の変化に似ているところがある。服装の流行の変遷も、終焉（しゅうえん）をむかえることはないだろう。しかし服装の場合は、同じ個人が年月を経たあげくに以前の好みに帰るということがありうるが、芸術の場合は不可逆的であるように思われる。服装の流行は循環しうるが、芸術の場合は過去とまったく同じスタイルが復活することはないように思われるのである。

伝統や歴史の中で先行のものを基盤としてはじめて芸術が成立するのだとすれば、「すぐれた芸術作品は時代を越えて万人の胸を打つものだ」という考えは誤解をはらんでいると言えるだろう。

アリストテレスは、詩人の方が歴史家よりもすぐれていると考えた。それは、歴史家が現実的事実にかかわるのに対し、詩人は可能性にかかわるからである。このことでアリストテ

レスが意味しているのは、歴史家は現実の個別的事物にあてはまることしか語らないが、詩人（叙事詩、悲劇、喜劇などの作者）は人間一般など、普遍的に成り立つことを語る、ということである。これは重要な指摘であるとわたしは思う。しかしそれを拡張して、すぐれた芸術は時代と場所を越えて万人の胸を打つ、とまで言うのは飛躍である。作品に感動するためには、伝統のなかに身をおいて、先行するものを十分理解していなくてはならない。先行のものから離れては制作も鑑賞もできないのである。

B 「芸術は人間の純粋な感性に訴える」という考え方も誤解を招くものである。芸術が知性だけで十分だ、と言えないことは明らかであるが、かといって感性さえあればよい、というものでもない。制作にも鑑賞にも、何が先行するもので、どのように変形されているかということに対する理解の果たす役割は大きい。この理解は、感動することとは違うし、制作することとも違うが、感動にも制作にも不可欠のものである。理解ということでわたしが意味しているのは、制作の背景とか動機（芸術家の生い立ちとか社会情勢など）についての知識ではなく、基本的には、変形の理解をはじめ、専門家の条件の多くを含む複合的なもののことである。

（土屋賢二『猫とロボットとモーツァルト』による）

（注） クーンのいうパラダイム・チェンジ ―― アメリカの科学哲学者トーマス・クーン（一九二三～一九九六）が提示した概念で、科学者たちが共通して用いている思考パターン自体が転換すること。

問一　傍線部Ａ「どんなに『完璧な作品』を作っても、それで終わりということにはならない」とあるが、それはなぜか、説明せよ。

問二　傍線部Ｂ『『芸術は人間の純粋な感性に訴える』という考え方も誤解を招くものである」とあるがどういうことか、説明せよ。

（補充問題）

問一　傍線部A「どんなに『完璧な作品』を作っても、それで終わりということにはならない」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 客観的にその発達を測ることができる科学に対して、芸術の分野ではそうした尺度がないため、芸術家は常にその尺度を作ろうとして、絶えず創作を試みるから。

② いかにすぐれた芸術作品を作り上げようとも、その作品は多くの人々に評価され、流行するため、次第にその芸術作品に慣れてしまい、それとは違う新たな作品が求められるようになるから。

③ 科学においては、変化は最終的な目標に達していないことを示すものだが、芸術においては、変化は新たな作品を生み出す絶え間ない運動であり、先行作品の変形が必然的なものだから。

④ 科学は、より高度なものへ、優れたものへ、という形で変化していくが、芸術作品の創造は、そうした絶えず上昇していく変化ではなく、循環的な変化だから。

⑤ 芸術作品は、先行して作られた作品の影響下にあり、先行する作品を十分理解し、それを模倣、変形して創作しようとするが、芸術においては完全な理解が不可能だから。

問二　傍線部B『芸術は人間の純粋な感性に訴える』という考え方も誤解を招くものである」とあるが、その理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 芸術を味わうことはそれ以前の作品との違いを味わうことでもあり、その意味で、様々な作品の形についての知識や、その変形を識別する能力が必要とされるため。

② 芸術は、人間の純粋な感性に訴えるというよりも、人間の醜さや弱点をも含めた、純粋とはいえないような暗い感性にも訴えることができるため。

③ 芸術は人間にとっての普遍的な真実を追求するが、人間は時代によって変化しており、時代を超越した純粋な感性などは実際にありえないため。

④ 芸術はそれまでの芸術作品を十分理解、変形することから生み出されており、先行する芸術作品をだれが、いつ、どのように作り上げたかという専門的な知識が必要とされるため。

⑤ 芸術に感動するときには、だれしも純粋に芸術作品をとらえているのではなく、そこには鑑賞者の個人的な体験や好みなどが反映しているため。

夏のポイントチェック❷

【1】次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

人間科学における根本問題は、研究の対象が人間であり、それを行う主体の方も人間である、ということである。このことは、人間科学を考える上で忘れてはならないことである。しかし、「科学」という場合、われわれは、まず自然科学のことを考え、わけても物理学をその中心として考えるのではなかろうか。村上陽一郎は「科学」ということについて、常に深い思索を展開してきているが、一般に、科学的ということに対して、「分析的である」という暗黙の前提があり、このことをもう少し詳しく言えば、「現象を、ただ現象としてとらえるのではなく、その現象を、それを成立させている何らかの要素群に分解し、その要素群が、時間―空間のなかでどのように振る舞うか、その有様を記述することによって、もとの現象を説明する」ということになろう、と述べている。そして、このような考えに立つ限り、物理学が科学のなかの模範となってくるのも当然であろう、としている。

村上の言うとおり、この方法によって近代科学はその方法論を確立し、これによって得た事象の因果関係の法則を知ることにより、人間は自然を支配するようになってきたのである。近代科学の成果は取り立ててここに述べる必要がないほど、われわれは日毎にその恩恵を受けて生きている。このように近代科学の成果があまりにも見事であるので、近代科学による現実認識が唯一の正しいものである、という考えが一般に強くなってきたのも当然である。しかし、ここでわれわれは近代科学が正しいというのと、近代科学による世界観が正しいというのを区別して考えねばならない。

近代科学のはじまりにおいて、その方法論の根本にいわゆるデカルト―ニュートンのパラダイムがあることを忘れてはならない。このことは、必ずしも、デカルトやニュートンという人間がそのような世界観をもっていたことを意味するものではないが、近代科学のよって立つパラダイムを通常このように呼び習わしているのである。

デカルト―ニュートン・パラダイムにおいて、最も大切なことは、明確な「切断」の機能である。自と他を切り離すこと、精神と物質を切り離すことが第一の前提である。他から切り離された「自」が自と無関係に、「他」を観察する。その結果わかってきたことは、「自」と無関係である故に、誰にでも通用する普遍性をもつ。このことは実に偉大なことである。ニュートンの見出した法則は、ニュートンという人間、イギリスという国などを超えて普遍

的な真理としても提出できる。もちろん、これに対して疑問を呈することは誰でも可能であり、その際は、ニュートンの行ったのと同じ実験を、彼の「自」を事象から切り離す方法をaトウシュウして行い、検証することができる。論理実証主義という方法論によって、ある法則の正しさが、誰にでも何時でも、確かめることができるようになったのは、実に強力なことである。それのもつ普遍性というものが実に広いのである。

このことは、宗教における「正しい」ということと比較するとよくわかるであろう。各宗教がbヨウセイする正しさは、その教義を信じる人々にとっての普遍性をもつものではあっても、教義のまったく異なる宗教を信じる人々にとって、それは正しくないかも知れず、そのいずれが正しいかを実証する方法論は、普遍的なものとは成り難いのである。

自然科学の方法および、そこから得られる結果が普遍性をもち、その法則があまりに有効であるので、その方法を社会科学や人文科学が借りようとするのも無理からぬことである。そして、そのような方法によってそれなりの成果を得ている。そこで、自然科学の方法を人間に対しても適用することによって、「ア人間科学」が発展するわけで、生命科学などはこの部類に属するであろう。このような「人間科学」は今後ますます発展してゆくであろう。しかし、これだけによって、人間の研究のすべてをつくしているとは言い難いのである。ここで筆者の専門とする臨床心理学における例について考えてみよう。たとえば、ある非行少年に対して、われわれが「自」と「他」の区別を明らかにして、極めて客観的な研究を行った結果、その少年の非行の在り方、両親の生き方、友人の有無などから判断して、「再教育不能」と断定する。その後も、客観的観察を続けたところ、確かに非行はますます悪化し、先の科学的判断は正しいことが立証される。このようなことをしても、イまったくのナンセンスであることは誰しもわかるであろう。

このようなとき、臨床家のこころみることは、前述した自然科学的態度とは異なって、その非行少年の行為を、「それを成り立たせている何らかの要素群に分解し」たりするのではなく、まず、その少年を一個の全体的な人間として、むしろ、「自」と「他」との区別をできるだけなくするようにして、彼とのかかわりを求めてゆくことである。われわれがそのような態度で接してゆくと、その少年はあんがいに本音で話をしてくれたり、誰にも話をしたことのない大切な秘密を打明けたりして、そこから、彼が立ち直ってゆくきっかけが開かれたりする。もちろん、一度や二度の面接で事が解決することはなくて、われわれが前述のような態度で接し続けていると、彼もだんだんと変化して立ち直ってくる。ここは、そのことに

ついて論じる場ではないので省略するが、このような過程を記述することも、「ウ人間の科学」であると言えないであろうか。

キュブラー・ロスは死にゆく人を看とって、その過程として一般的に言って、1死の否認、2怒り、3（神との）取り引き、4抑うつ、5死の受容、の五段階を経ることを明らかにした。彼女のこのような発見は、現在においてターミナルケアをする人たちに対する重要なひとつの c シシンとなっている。このことにしても、もしキュブラー・ロスが死んでゆく人を「客観的観察の対象」とする態度で接していたのでは、決して明らかにならなかったであろう。つまり、研究の対象である人間に対して、研究者がどのような態度をとるかによって、そこに生じる現象が異なってくるし、また、エそのことこそが人間の研究にとって極めて大切なことなのである。

（河合隼雄「人間科学の可能性」）

〔注〕 村上陽一郎＝パラダイム。ここでは一時代の支配的なものの考え方の意味。
キュブラー・ロス＝アメリカの精神科医 ターミナルケア末期症状にある患者の世話。

問一 傍線部ア「人間科学」と傍線部ウ「人間の科学」はどのように異なるのか、一二〇字以内で説明せよ。

問二 傍線部イ「まったくのナンセンスである」とあるが、筆者はなぜそのように言うのか、説明せよ。

問三 傍線部エ「そのことこそが人間の研究にとって極めて大切なことなのである」とはどういうことか、本文全体の趣旨を踏まえて一〇〇字以上一二〇字以内で説明せよ（句読点も一字として数える）。

問四 傍線部a・b・cのカタカナに相当する漢字を楷書で書け。

(note)

【2】次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

〈成熟〉とはあきらかに〈未熟〉の対になる観念である。生まれ、育ち、大人になり、老いて、死を迎える……。そういう過程としてひとの生が思い浮かべられている。そのなかで大人になることと未だ大人になっていないこととが、〈成熟〉と〈未熟〉として生の過程を二分している。

〈成熟〉とはまずはひとが生きものとして自活できるということであろう。食べ、飲み、衣をまとい、居場所をもち、仲間と交際することが独力でできるということ、つまりはじぶんでじぶんの生活をマネージできるということであろう。もっともひとは、他の生きもの以上に、生活を他のひとと協同していとなむという意味で社会的なものであって、だから〈成熟〉とはその生活の相互依存ということを排除するものではない。産み落とされたとたんに見捨てられ、野ざらしになって死にっきりということがわたしたちの社会ではよほどのことがないかぎりありえない以上、生まれたときもわたしたちは他のひとたちに迎えられたのであり、死ぬときも他のひとたちに見送られる。だれもが、生まれるとすぐだれかに産着を着せられ、食べさせてもらうのであり、死ぬときもだれかに死装束にくるまれ、棺桶に入れてもらうのである。

そうするとひとが生きものとして自活できることといっても、単純に独力で生きるということではないということだ。食べ物ひとつ、まとう衣ひとつ手に入れるのも、他のひとたちの力を借りないとできないのがわたしたちの生活であるかぎり、自活できるというのは他のひとたちに依存しないで、というのとはちがうのである。むしろそういう相互の依存生活を安定したかたちで維持することをも含めて、つまりは、じぶんのことだけでなく共同の生活の維持をも含めて他のひとの生活をも慮りながらじぶん（たち）の生活をマネージできるということが、成熟するということなのである。

そうすると成熟／未熟ということも、たんに生物としての年齢では分けられなくなる。〈成熟〉には社会的な能力の育成ということ、つまりは訓練と心構えが必要になるからである。生物としてなら成長のしるし、たとえば性徴というものがあるが、大人になるということはそういう生物としての成長以上のものを求める。からだが大きくなるというのは、たとえ見かけは大人と変わらなくとも、ひとにおいては未だ〈成熟〉のしるしではないのである。

A〈成熟〉は成長とは異なる。成長は、誕生 - 成長 - 衰退（老化） - 死という、生のリニアな過程のなかにその一フェイズとして位置づけられる。人間のばあいは、ほとんどすべて

の社会で、この生き物としての成長（身体とその能力の成長）の過程にさらに子どもと大人という区分が重ね描きされている。生物学的な成長の区別だけではなく、社会的な承認／未承認という規範的な区別が、ひととしての生の過程のなかに挿し込まれるということである。その承認はふつう「成人儀礼」というかたちで社会的にとりおこなわれる。その時期は多くの社会で十二歳から十五歳あたりに設定されてきたが、現代のように二十歳に設定されることもある。そのかぎりでそこには文化の恣意性が入りこんでいる。が、成熟／未熟というのはそうした大人／子どもの区別なのでもない。Bそれはさらにその上に重ね書きされる価値的な区別である。だから未熟なままで大人になる者もいるし、幼くしてすでに成熟している者もいる。

「通過儀礼はただ単に大人と子供とを分けるためにあるのではない。少なくとも年齢による大人と子供、老と若を区別するためにあるのではなく、むしろ大人と子供と言う概念を放棄して、経験の深さのちがいをはっきりさせるものなのである」。

このような指摘をするのは、哲学者の中村雄二郎である。成人儀礼という通過儀礼を、中村はここで、大人／子どもの区別をつける儀礼としてではなく、むしろ成熟／未熟の区別をつける儀礼として位置づけている。しかし、混乱続きの現在の「成人式」を見てそれが成熟を承認する儀礼だと考えるひとはおそらくいないだろう。

（鷲田清一『「大人」になれない社会?」による）

問　傍線部B「それはさらにその上に重ね書きされる価値的な区別である」とあるが、どういうことか、説明せよ。

問1　傍線部Ａ「〈成熟〉は成長とは異なる」とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 成長とは単に身体やその能力が成長していくことを言うが、〈成熟〉は、人が自分で自分の生活を独力で営めるようになっていくことを意味する。

② 成長とは身体が大きくなることとはいっても生物的な意味とは異なるが、さらに〈成熟〉は、他の生物とは異なり、社会的成長という面までを含む。

③ 成長とは身体の成長という外見的に判断可能なものだが、〈成熟〉は、見かけと関係なく、自分のことを自分でやろうとする内面的自立のことである。

④ 成長とは単に身体やその能力が成長することを言うが、〈成熟〉は、社会のなかで安定した相互の依存生活を営めるようになることを意味する。

⑤ 成長とは、身体面と、社会的な心構えが持てるようになる心理面での成長の双方をさすが、〈成熟〉は社会的生活ができるようになることを意味する。

問2　傍線部Ｂ「それはさらにその上に重ね書きされる価値的な区別である」とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 社会が恣意的に決定した大人と子どもの区別は、各社会が決めた価値的なものであるため、未熟なまま大人になったり、その逆の状態が発生したりするということ。

② 成熟／未熟の区別は、社会恣意的な大人／子どもの区別でなく、さらにその上に社会的な相互依存生活ができるかどうかという判断が加わっているということ。

③ 「成人儀礼」としての通過儀礼は、単に年齢によって大人と子どもとを分けるためにあるのではなく、経験深さの違いをはっきりさせるためのものだったということ。

④ 社会が恣意的に決定した大人／子どもという区別の上に、「成人儀礼」というかたちで重ね書きされたものが、成熟／未熟の区別であるということ。

⑤ 成熟／未熟の区別は、社会が恣意的に決めた大人／子どもの区別に加えて、身体的、能力的に価値的な成長があって初めて可能になるものだということ。

(note)

夏のポイントチェック❸

【1】次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

国立小劇場の第十三回文楽公演（一九七〇年）を昼夜九時間あまりぶっ通しに観て、むろんいささかの肉体的疲労も感じはしたが、それよりも私には、一種清爽な、発見的な衝撃にみちた昂奮（こう）がしばらくの間残っていた。自然的な肉体をもった生身の俳優たちが二本足を交互に動かしてあるきまわる現代演劇のどの舞台にも見られない雅（みやび）びや自然さや聖なる激情が、どうしてこの人形仕掛という器具性を媒体にした機械演劇からこれほど圧倒的に流出してくるのであろうか？ (1)この逆説がもしかしたら現代演劇の最大の盲点を衝いているかもしれない、と私は考えた。

西欧近代演劇史上において操り人形の「優美」と人間の演技の「わざとらしさ」とを対比させ、前者の運動の完璧さに一も二もなく軍配を挙げたのは、『マリオネット芝居について』のエッセイスト、(注1)ハインリヒ・フォン・クライストであった。クライストがそこで「わざとらしさ」と「自然な優美」との間に横たわる深淵として指摘しているのは、肉体と意識との分裂の深淵である。獣や幼年者や物質（人形）の蒙（もう）昧な同一性のまどろみは、意識という反射装置の介入によって破壊されて、たえず鏡の前におのが姿を映しながら行動する人間のわざとらしさ（虚栄）へと変性する。

「なぜなら、お分りでしょうが、娘が運動の重心以外のどこかある点におかれると、わざとらしさが現われてくるのです。」

「人間の自然な優美さのなかに、意識というものがどんなに混乱をひき起すか、私は熟知しております。」

この対話篇の語り手は舞踊家で、マリオネットの、操り手（マシニスト）に操られているためにそれ自体には重さというもののない、したがって大地というものが休息や停滞の場ではなくて、次の跳躍のための契機の意味しかもたない反重力的空間のなかの天使的住人であることの特権を讃嘆しているのである。

(注2)ゴードン・クレイグによれば、紀元前八〇〇年頃のテーベやアジア各地を出生の母胎とする人形劇こそは純粋な演劇であって、俳優によって演じられる西欧近代劇はことごとく「芸術」ではないのである。

「そもそものはじめには人間の肉体は演劇芸術の具には用いられなかった。人間的感情が大

衆にあたえられるべき見世物と考えられたことはなかったのである。」

西欧演劇はこれに反して、人間の肉体を演劇の器具（アンストリュマン）として用いる過誤を犯しつづけてきた。かくて人間的な弱さが次々に舞台に露頭し、舞台は効果（エフェクト）と虚栄（ヴァニテ）（クライストのいわゆる「わざとらしさ」）をもとめる場と化したのである。ゴードン・クレイグも言うように、その結果は演劇における「聖性」の無惨な衰弱を招いた。

（種村季弘「器具としての肉体」による）

（注）1　ハインリヒ・フォン・クライスト――ドイツの劇作家・小説家（一七七七～一八一一）。
2　ゴードン・クレイグ――イギリスの演出家・演劇理論家（一八七二～一九六六）。
3　E・R・クルティウス――ドイツの文学者（一八八六～一九五六）。

問一　傍線線(1)「この逆説がもしかしたら現代演劇の最大の盲点を衝いているかもしれない」とあるが、どういうことか、説明せよ。

※解答枠は、3行

【2】次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

彫刻の起源は、おそらく絵画よりもはるかに遡ったところ、(注1)ボードレールの言葉を借りて言えば「有史以前の暗黒の中」にあるだろう。そのボードレールは、『一八四六年のサロン』のなかで、「彫刻はなぜ退屈であるか」という一節をわざわざ設けて、彫刻の悪口を書いている。この悪口は痛烈なものである。

絵画は「推論の芸術」であって、これをイキョウジュするには一種の手ほどきが要る。石や木でこしらえた何かの模造物を撫で回したり崇拝したりするのに推論は要らぬ。だから、精神において最も素朴でログドンな者たちも嬉々としてそれを行なってきた。が、絵画の前ではそうはいかない。指で触れえぬものの神秘が、絵画というものには常にある。彫刻はむき出しの物体そのもので、どこにも不明瞭な点はないように思える。けれども、それを一体どの位置、どの角度から視ればよいのかがわからない。作り手が、ひとつの視点に固執したところで無駄なことである。視る側は、ぐるぐる回って無数の位置から視る。ふとした光線のいたずらが、時としてそれを素晴らしいものに見せるが、そういう偶然ほど芸術家にとって不名誉なものはない。そう考えれば、(1)絵画の専横や排他性こそ芸術の強度を具現するものではないか。

要するに、彫刻が視覚対象、あるいは感覚対象となることの弱さ、曖昧さに対して、ボードレールは我慢がならないのであろう。この弱点によって、彫刻は建築の装飾物や日常の玩ハ弄品となってしまい、芸術作品の厳密さを持ちえない。(注2)ロダンという人は、彫刻へのボードレールのこのニ罵倒に、まさに応えるべくして生まれてきた人物のように見える。彼は、彫刻が厳密な視覚対象となるために必要なあらゆる革新を彫刻のなかに持ち込んだ。(注3)リルケの「オーギュスト・ロダン」は、そのことを実に精細に書き込んでいる。

（前田英樹『深さ、記号』による）

（注）1　ボードレール ―― フランスの詩人・批評家（一八二一～一八六七）。
2　ロダン ―― フランスの彫刻家（一八四〇～一九一七）。
3　リルケ ―― ドイツの詩人・作家（一八七五～一九二六）。

問一　傍線部(1)「絵画の専横や排他性こそ芸術の強度を具現する」とあるが、どういうことか、七〇字以内で説明せよ。

問二　傍線部イ・ロのカタカナを漢字に直し、ハ・ニの漢字はその読みを記せ。ただしハは、次の文中での読みを記せ。

「彼女は話をぼんやりと聴きながら、ハンカチを弄んでいた。」

夏のポイントチェック❹

【1】次の文章は、黒井千次「庭の男」（一九九一年発表）の一節である。「私」は会社勤めを終え、自宅で過ごすことが多くなっている。隣家（大野家）の庭に息子のためのプレハブ小屋が建ち、そこに立てかけられた看板に描かれた男が、「私」の自宅のダイニングキチン（キッチン）から見える。その存在が徐々に気になりはじめた「私」は、看板のことを妻に相談するなかで、自分が案山子をどけてくれと頼んでいる雀のようだと感じていた。以下はそれに続く場面である。これを読んで、後の問に答えよ。

立看板をなんとかするよう裏の家の息子に頼んでみたら、という妻の示唆を、私は大真面目で受け止めていたわけではなかった。落着いて考えてみれば、その理由を中学生かそこらの少年にどう説明すればよいのか見当もつかない。相手は看板を案山子などとは夢にも思っていないだろうから、雀の論理は通用すまい。ただあの時は、妻が私の側に立ってくれたことに救われ、気持ちが楽になっただけの話だった。いやそれ以上に、男と睨み合った時、なんだ、お前は案山子ではないか、と言ってやる僅かなゆとりが生れるほどの力にはなった。裏返されればそれまでだぞ、と窓の中から毒突くのは、一方的に見詰められるのみの関係に比べればまだましだったといえる。

しかし実際には、看板を裏返す手立てが摑めぬ限り、いくら毒突いても所詮空威張りに過ぎぬのは明らかである。そして裏の男は、私のそんな焦りを見透したかのように、前にもまして帽子の広いつばの下の眼に暗い光を溜め、こちらを凝視して止まなかった。流しの窓の前に立たずとも、あの男が見ている、との感じは肌に伝わった。暑いのを我慢して南側の子供部屋で本を読んだりしていると、すぐ隣の居間に男の視線の気配を覚えた。そうなると、本を伏せてわざわざダイニングキチンまで出向き、あの男がいつもと同じ場所に立っているのを確かめるまで落着けなかった。

隣の家に電話をかけ、親に事情を話して看板をどうにかしてもらう、という手も考えた。少年の頭越しのそんな手段はフェアではないだろう、との意識も働いたし、その前に親を納得させる自信がない。もしも納得せぬまま、ただこちらとのいざこざを避けるために親が看板を除去してくれたとしても、相手の内にいかなる疑惑が芽生えるかは容易に想像がつく。あの家には頭のおかしな人間が住んでいる、そんな噂を立てられるのは恐ろしかった。

ある夕暮れ、それは妻が家に居る日だったが、日が沈んで外が少し涼しくなった頃、散歩

に行くぞ、と裏の男に眼で告げて玄関を出た。家を離れて少し歩いた時、町会の掲示板のある角を曲って来る人影に気がついた。迷彩色のシャツをだらしなくジーパンの上に出し、俯きかげんに道の端をのろのろと近づいて来る。まだ育ち切らぬ柔らかな骨格と、無理に背伸びした身なりとのアンバランスな組合せがおかしかった。細い首に支えられた坊主頭がふと上り、またすぐに伏せられた。A隣の少年だ、と思うと同時に、私はほとんど無意識のように道の反対側に移って彼の前に立っていた。

「ちょっと」

声を掛けられた少年は怯えた表情で立ち止り、それが誰かわかると小さく頷く仕種で頭だけ下げ、私を避けて通り過ぎようとした。

「庭のプレハブは君の部屋だろう」

何か曖昧な母音を洩らして彼は微かに頷いた。

「あそこに立てかけてあるのは、映画の看板かい」

細い眼が閉じられるほど細くなって、警戒の色が顔に浮かんだ。

「素敵な絵だけどさ、うちの台所の窓の真正面になるんだ。置いてあるだけなら、あのオジサンを横に移すか、裏返しにするか――」

そこまで言いかけると、相手は肩を聳やかす身振りで歩き出そうとした。

「待ってくれよ、頼んでいるんだから」

肩越しに振り返る相手の顔は無表情に近かった。

「もしもさ――」

追おうとした私を振り切って彼は急ぎもせずに離れて行く。

「ジジイ――」

吐き捨てるように彼の俯いたまま低く叫ぶ声がはっきり聞えた。少年の姿が大野家の石の門に吸い込まれるまで、私はそこに立ったまま見送っていた。

ひどく後味の悪い夕刻の出来事を、私は妻に知られたくなかった。少年から見れば我が身が碌な勤め先も持たぬジジイであることに間違いはなかったろうが、一応は礼を尽して頼んでいるつもりだったのだから、中学生の餓鬼にそれを無視され、罵られたのは身に応えた。B身体の底を殴られたような厭な痛みを少しでも和らげるために、こちらの申し入れが理不尽なものであり、相手の反応は無理もなかったのだ、と考えてみようともした。謂れもない内政干渉として彼が憤る気持ちもわからぬではなかった。しかしそれなら、彼は面を上げて

私の申し入れを拒絶すればよかったのだ。所詮当方は雀の論理しか持ち合わせぬのだから、黙って引き下るしかないわけだ。その方が私もまだ救われたろう。

無視と捨台詞にも似た罵言とは、彼が息子よりも遥かに歳若い少年だけに、やはり耐え難かった。

夜が更けてクーラーをつけた寝室に妻が引込んでしまった後も、私は一人居間のソファーに坐り続けた。穏やかな鼾が寝室の戸の隙間を洩れて来るのを待ってから、大型の懐中電灯を手にしてダイニングキチンの窓に近づいた。もしや、という淡い期待を抱いて隣家の庭を窺った。手前の木々の葉越しにプレハブ小屋の影がぼうと白く漂うだけで、庭は闇に包まれている。網戸に擦りつけるようにして懐中電灯の明りをともした。光の環の中に、きっと私を睨み返す男の顔が浮かんだ。闇に縁取られたその顔は肌に血の色さえ滲ませ、昼間より一層生々しかった。

「馬鹿奴」

呟く声が身体にこもった。暗闇に立つ男を罵っているのか、夕刻の少年に怒りをぶつけているのか、自らを嘲っているのか、自分でもわからなかった。懐中電灯を手にしたまま素早く玄関を出た。土地ぎりぎりに建てた家の壁と塀の間を身体を斜めにしてすり抜ける。建築法がどうなっているのか識らないが、もう少し肥れば通ることの叶わぬ僅かな隙間だった。ランニングシャツ一枚の肩や腕に（注）モルタルのざらつきが痛かった。

東隣との低い生垣に突き当り、檜葉の間を強引に割ってそこを跨ぎ越し、我が家のプロック塀の端を迂回すると再び大野家との生垣を掻き分けて裏の庭へと踏み込んだ。乾いた小さな音がして枝が折れたようだったが、気にかける余裕はなかった。

繁みの下の暗がりで一息つき、足元から先に懐中電灯の光をさっと這わせてすぐ消した。右手の母屋も正面のプレハブ小屋も、明りは消えて闇に沈んでいる。身を屈めたまま手探りに進み、地面に雑然と置かれている小さなベンチや傘立てや三輪車をよけて目指す小屋の横に出た。

男は見上げる高さでそこに平たく立っていた。光を当てなくとも顔の輪郭は夜空の下にぼんやり認められた。そんなただの板と、窓から見える男が同一人物とは到底信じ難かった。これではあの餓鬼に私の言うことが通じなかったとしても無理はない。案山子にとまった雀はこんな気分がするだろうか、と動悸を抑えつつも苦笑した。

しかし濡れたように滑らかな板の表面に触れた時、指先に厭な違和感が走った。それがべ

ニヤ板でも紙でもなく、硬質のプラスチックに似た物体だったからだ。思わず懐中電灯をつけてみずにはいられなかった。果(はた)して断面は分厚い白色で、裏側に光を差し入れるとそこには金属の補強材が縦横に渡されている。人物の描かれた表面処理がいかなるものかまでは咄(とつ)嗟(さ)に摑めなかったが、それが単純に紙を貼りつけただけの代物ではないらしい、との想像はついた。雨に打たれて果(はかな)無く消えるどころか、これは土に埋められても腐ることのないしたたかな男だったのだ。

それを横にずらすか、道に面した壁に向きを変えて立てかけることは出来ぬものか、と持ち上げようとした。相手は根が生えたかの如(ごと)く動かない。これだけの厚みと大きさがあれば体重もかなりのものになるのだろうか。力の入れやすい手がかりを探ろうとして看板の縁を辿(たど)った指が何かに当った。太い針金だった。看板の左端にあけた穴を通して、針金は小屋の樋(とい)としっかり結ばれている。同じような右側の針金の先は、壁に突き出たボルトの頭に巻きついていた。その細工が左右に三つずつ、六カ所にわたって施されているのを確かめると、最早(もはや)男を動かすことは諦めざるを得なかった。夕暮れの少年の細めた眼を思い出し、理由はわからぬものの、Cあ奴はあ奴でかなりの覚悟でことに臨んでいるのだ、と認めてやりたいような気分がよぎった。

(注) モルタル ―― セメントと砂を混ぜ、水で練り合わせたもの。タイルなどの接合や、外壁の塗装などに用いる。

問一　傍線部Ａ「隣の少年だ、と思うと同時に、私はほとんど無意識のように道の反対側に移って彼の前に立っていた。」とあるが、「私」をそのような行動に駆り立てた要因はどのようなことか。その説明として適当なものを、次の①～⑥のうちから**二つ**選べ。ただし、解答の順序は問わない。

① 親が看板を取り除いたとしても、少年にどんな疑惑が芽生えるか想像し恐ろしく思っていたこと。

② 少年を差し置いて親に連絡するような手段は、フェアではないだろうと考えていたこと。

③ 男と睨み合ったとき、お前は案山子ではないかと言ってやるだけの余裕が生まれていたこと。

④ 男の視線を感じると、男がいつもの場所に立っているのを確かめるまで安心できなかったこと。

⑤ 少年の発育途上の幼い骨格と、無理に背伸びした身なりとの不均衡をいぶかしく感じていたこと。

⑥ 少年を説得する方法を思いつけないにもかかわらず、看板をどうにかしてほしいと願っていたこと。

問二　傍線部Ｂ「身体の底を殴られたような厭な痛み」とはどのようなものか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 頼みごとに耳を傾けでもらえないうえに、話しかけた際の気遣いも顧みられず一方的に暴言を浴びせられ、存在が根底から否定されたように感じたことによる、解消し難い不快感。

② 礼を尽くして頼んだにもかかわらず少年から非難され、自尊心が損なわれたことに加え、そのことを妻にも言えないほどの汚点だと捉えたことによる、深い孤独と屈辱感。

③ 分別のある大人として交渉にあたれば、説得できると見込んでいた歳若い相手から拒絶され、常識だと信じていたことや経験までもが否定されたように感じたことによる、抑え難いいら立ち。

④ へりくだった態度で接したために、少年を増長させてしまった一連の流れを思い返し、看板についての交渉が絶望的になったと感じたことによる、胸中をえぐられるような癒し難い無念さ。

⑤ 看板について悩む自分に、珍しく助言してくれた妻の言葉を真に受け、幼さの残る少年に対して一方的な干渉をしてしまった自分の態度に、理不尽さを感じたことによる強い失望と後悔。

問三　傍線部C「あ奴はあ奴でかなりの覚悟でことに臨んでいるのだ、と認めてやりたいような気分がよぎった」における「私」の心情の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 夜中に隣家の庭に忍び込むには決意を必要としたため、看板を隣家の窓に向けて設置した少年も同様に決意をもって行動した可能性に思い至り、共感を覚えたことで、彼を見直したいような気持ちが心をかすめた。

② 隣家の迷惑を顧みることなく、看板を撤去し難いほど堅固に設置した少年の行動には、彼なりの強い思いが込められていた可能性があると気づき、陰ながら応援したいような新た感情が心をかすめた。

③ 劣化しにくい素材で作られ、しっかり固定された看板を目の当たりにしたことで、少年が何らかの決意をもってそれを設置したことを認め、その心構えについては受け止めたいような思いが心をかすめた。

④ 迷惑な看板を設置したことについて、具体的な対応を求めるつもりだったが、撤去の難しさを確認したことで、この状況を受け入れてしまったほうが気が楽になるのではないかという思いが心をかすめた。

⑤ 看板の素材や設置方法を直接確認し、看板に対する少年の強い思いを想像したことで、彼の気持ちを無視して一方的に苦情を申し立てようとしたことを悔やみ、多少なら歩み寄ってもよいという考えが心をかすめた。

問四　本文では、同一の人物や事物が様々に呼び表されている。それらに着目した、後の(i)・(ii)の問に答えよ。

(i)　隣家の少年を示す表現に表れる「私」の心情の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

①　当初はあくまで他人として「裏の家の息子」と捉えているが、実際に遭遇した少年に未熟さを認めたのちには、「息子よりも遥かに歳若い少年」と表して我が子に向けるような親しみを抱いている。

②　看板への対応を依頼する少年に礼を尽くそうとして「君」と声をかけたが、無礼な言葉と態度を向けられたことで感情的になり、「中学生の餓鬼」「あの餓鬼」と称して怒りを抑えられなくなっている。

③　看板撤去の交渉をする相手として、少年とのやりとりの最中はつねに「君」と呼んで尊重する様子を見せる一方で、少年の外見や言動に対して内心では「中学生の餓鬼」「あの餓鬼」と侮っている。

④　交渉をうまく進めるために「君」と声をかけたが、直接の接触によって我が身の老いを強く意識させられたことで、「中学生の餓鬼」「息子よりも遥かに歳若い少年」と称して彼の若さをうらやんでいる。

⑤　当初は親の方を意識して「裏の家の息子」と表していたが、実際に遭遇したのちには少年を強く意識し、「中学生の餓鬼」「息子よりも遥かに歳若い少年」と彼の年頃を外見から判断しようとしている。

(ii)　看板の絵に対する表現から読み取れる、「私」の様子や心情の説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。

①　「私」は看板を「裏の男」と人間のように意識しているが、少年の前では「映画の看板」と呼び、自分の意識が露呈しないように工夫する。しかし少年が警戒すると、「素敵な絵」とたたえて配慮を示した直後に「あのオジサン」と無遠慮に呼んでおり、余裕をなくして表現の一貫性を失った様子が読み取れる。

②　「私」は看板について「あの男」「案山子」と比喩的に語っているが、少年の前では「素敵な絵」と大げさにたたえており、さらに、少年が憧れているらしい映画俳優への敬意を全面的に示すように「あのオジサン」と呼んでいる。少年との交渉をうまく運ぼうとして、プライドを捨てて卑屈に振るまう様子が読み取れる。

③　「私」は妻の前では看板を「案山子」と呼び、単なる物として軽視しているが、少年の前では「素敵な絵」とたたえ、さらに「あのオジサン」と親しみを込めて呼んでいる。しかし、少年から拒絶の態度を示されると、「看板の絵」「横に移」「裏返しにする」と物

扱いしており、態度を都合よく変えている様子が読み取れる。

④「私」は看板を「裏の男」「あの男」と人間に見立てているが、少年の前でとっさに「映画の看板」「素敵な絵」と表してしまったため、親しみを込めながら「あのオジサン」と呼び直している。突然訪れた少年との直接交渉の機会に動揺し、看板の絵を表する言葉を見失い慌てふためいている様子が読み取れる。

問五　Ｎさんは、二重傍線部「案山子にとまった雀はこんな気分がするだろうか、と動悸を抑えつつも苦笑した。」について理解を深めようとした。まず、国語辞典で「案山子」を調べたところ季語であることがわかった。そこでさらに、歳時記（季語を分類して解説や例句をつけた書物）から「案山子」と「雀」が詠まれた俳句を探し、これらの内容を【ノート】に整理した。このことについて、後の(i)・(ii)の問に答えよ。

【ノート】

●国語辞典にある「案山子」の意味

㋐　竹や藁などで人の形を造り、田畑に立てて、鳥獣が寄るのをおどし防ぐもの。とりおどし。

㋑　見かけばかりもっともらしくて、役に立たない人。

季語・秋。

●歳時記に掲載されている案山子と雀の俳句

ⓐ「案山子立つれば群雀空にしづまらず」（飯田蛇笏（だこつ））

ⓑ「稲雀追ふ力なき案山子かな」（高浜年尾）

ⓒ「某（それがし）は案山子にて候（そうろう）雀殿」（夏目漱石）

●解釈のメモ

ⓐ　遠くにいる案山子に脅かされて雀が群れ騒ぐ風景。

ⓑ　雀を追い払えない案山子の様子。

ⓒ　案山子が雀に対して虚勢を張っているように見える様子。

●「案山子」と「雀」の関係に注目し、看板に対する「私」の認識を捉えるための観点。

・看板を家の窓から見ていた時の「私」　→　X

・看板に近づいた時の「私」　→　Y

(i) Nさんは、「私」が看板を家の窓から見ていた時と近づいた時にわけたうえで、国語辞典や歳時記の内容と関連づけながら【ノート】の傍線部について考えようとした。空欄XとYに入る内容の組合せとして最も適当なものを、後の①～④のうちから一つ選べ。

(ア) X ―― 歳時記の句ⓐでは案山子の存在に雀がざわめいている様子であり、国語辞典の説明アにある「おどし防ぐ」存在となっていることに注目する。

(イ) X ―― 歳時記の句ⓒでは案山子が虚勢を張っているように見え、国語辞典の説明イにある「見かけばかりもっともらし」い存在となっていることに注目する。

(ウ) Y ―― 歳時記の句ⓑでは案山子が実際には雀を追い払うことができず、国語辞典の説明イにある「見かけばかりもっともらし」い存在となっていることに注目する。

(エ) Y ―― 歳時記の句ⓒでは案山子が雀に対して自ら名乗ってみせるだけで、国語辞典の説明アにある「おどし防ぐ」存在となっていることに注目する。

① X―(ア) Y―(ウ)
② X―(ア) Y―(エ)
③ X―(イ) Y―(ウ)
④ X―(イ) Y―(エ)

(ii) **【ノート】**を踏まえて「私」の看板に対する認識の変化や心情について説明したものとして、最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① はじめ「私」は、ⓒ「某は案山子にて候雀殿」の虚勢を張る「案山子」のような看板に近づけず、家のなかから眺めているだけの状態であった。しかし、そばまで近づいたことで、看板は㋑「見かけばかりもっともらし」いものであることに気づき、これまで「ただの板」にこだわり続けていたことに対して大人げなさを感じている。

② はじめ「私」は、ⓑ「稲雀追ふ力なき案山子かな」の「案山子」のように看板は自分に危害を加えるようなものではないと理解していた。しかし、意を決して裏の庭に忍び込んだことで、看板の㋐「おどし防ぐもの」としての効果を実感し、雀の立場として「ただの板」に苦しんでいる自分に気恥ずかしさを感じている。

③ はじめ「私」は、自分を監視している存在として看板を捉え、㋐「おどし防ぐもの」と対面するような落ち着かない状態であった。しかし、おそるおそる近づいてみたことで、ⓒ「某は案山子にて候雀殿」のように看板の正体を明確に認識し、「ただの板」に対する怖さを克服しえた自分に自信をもつことができたと感じている。

④ はじめ「私」は、㋐「とりおどし」のような脅すものとして看板をとらえ、その存在の不気味さを感じている状態であった。しかし、暗闇に紛れて近づいたことにより、実際にはⓑ「稲雀追ふ力なき案山子かな」のような存在であることを発見し、「ただの板」である看板に心を乱されていた自分に哀れみを感じている。

⑤ はじめ「私」は、常に自分を見つめる看板に対してⓐ「群雀空にしづまらず」の「雀」のような心穏やかでない状態であった。しかし、そばに近づいてみたことにより、看板は㋑「見かけばかりもっともらし」いものであって恐れるに足りないとわかり、「ただの板」に対して悩んできた自分に滑稽さを感じている。

(note)

次の文章は、井上荒野（いのうえあれの）の小説「キュウリいろいろ」の一節である。郁子は三十五年前に息子を亡くし、以来夫婦ふたり暮らしだったが、昨年夫が亡くなった。以下は、郁子がはじめてひとりでお盆を迎える場面から始まる。これを読んで、後の問いに答えよ。

おいしいビールを飲みながら、郁子は楊枝をキュウリに刺して、二頭の（注1）馬を作った。本棚に並べた息子と夫の写真の前に置く。

キュウリで作るのは馬、茄子（なす）で作るのは牛の見立てだという。郁子は田舎の生まれだから、実家の立派な仏壇にも、お盆の頃には提灯（ちょうちん）と一緒にそれらが飾られていた。足の速い馬は仏様がこちらへ来るときに、足の遅い牛は仏様が向こうへ戻るときに乗っていただくのだという。

実家を出てからも、郁子は毎年それを作ってきた。三十五年間――息子の草（そう）が亡くなってからずっと。

馬に乗って帰ってきてほしかったし、一緒に連れていってほしかった。あるときそれを夫に打ち明けてしまったことがある。キュウリの馬を作っていたら、君はほんとにそういうことを細々と熱心にやるねと、からかう口調で言われて、なんだか妙に腹が立ったのだ。あの子と一緒に乗っていけるように、立派な馬を作ってるのよ。言った瞬間に後悔したが、遅かった。俊介は何も言い返さなかった。ただ、それまでの無邪気な微笑（ほほえ）みがすっと消えて、暗い、寂しい顔になった。

後悔はしたのだ、いつも。だがなぜか再び舌が勝手に動いて、憎まれ口が飛び出す。そういうことが幾度もあった。俊介はたまったものではなかっただろう。いつも黙り込むだけだったが、いちどだけ（ア）腹に据えかねたのか「別れようか」と言われたことがあった。

別れようか。俺と一緒にいることが、そんなにつらいのなら……。

いやよ。郁子は即座にそう答えた。とうとう夫がその言葉を言ったということに（イ）戦きながら、でもその衝撃を悟られまいと虚勢を張って。

あなたは逃げるつもりなのね？　そんなの許さない。わたしは絶対に別れない。

震える声を抑えながら、そう言った。それは本心でもあった。息子の死、息子の記憶に、ひとりでなんかとうてい耐えきれるはずがなかった。だから昨年、俊介が死んでしまったときは、怒りがあった。とうとう逃げたのね、と感じた。怒りは悲しみよりも大きいようで、どうしていいかわからなかった。

郁子はビールを飲み干すと、息子の写真を見、それから夫の写真を見た。キュウリの馬は、それぞれにちゃんと一頭ずつ作ったのだった。帰りの牛がないけれど、べつに帰らなくたっていいわよねえ、と思う。馬に乗ってきて、そのままずっとわたしのそばにいればいい。

A写真の俊介が苦笑したように見えた。亡くなる少し前、友人夫婦と山へ行ったときのの(注2)スナップ。会話しながら笑っている顔。いかにも愉(たの)しげなゆったりとした表情をしているが、あとから友人にあれはあなたと喋(しゃべ)っているときよと教えられた。嘘(うそ)だわと思い、本当かしらとも思った。

数日前の同級生からの用件は、俊介の写真を借りたい、というものだった。名簿は一ページを四人で分割する形にして、本人が書いた簡単なプロフィールとともに、高校時代のスナップと、現在の写真を並べて載せたいのだという。この写真を貸すことはできるが、そうしたら返ってくるまでの間、書棚の額の片方が空になってしまう。

そのことが目下の懸案事項なのだった。写真を探さなければならない、と郁子は思った——じつのところ、この数日ずっとそう思っていた。夫と暮らした約四十年間の間に撮ったり、撮られたりして溜(た)まったスナップ写真は、押し入れの下段の布張りの箱に収まっている。箱の上には俊介が整理したアルバムも三冊ある。あれを取り出してみなければ。郁子はそう考え、なんだかもうずっと前、三十年も四十年も前から、そのことばかり考え続けていたような気がした。

(注)　1　馬 —— お盆の時に、キュウリを使って、死者の霊が乗る馬に見立てて作るもの。

　　2　スナップ —— スナップ写真のこと。人物などの瞬間的な動作や表情を撮った写真。

問1 傍線部(ア)・(イ)の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

(ア) 腹に据えかねた

① 本心を隠しきれなかった
② 我慢ができなかった
③ 合点がいかなかった
④ 気配りが足りなかった
⑤ 気持ちが静まらなかった

(イ) 戦(おのの)きながら

① 勇んで奮い立ちながら
② 驚いてうろたえながら
③ 慌てて取り繕いながら
④ あきれて戸惑いながら
⑤ ひるんでおびえながら

問2 傍線部A「写真の俊介が苦笑したように見えた。」とあるが、そのように郁子に見えたのはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① キュウリで馬を作る自分に共感しなかった夫を今も憎らしく思っているが、そんな自分のことを、夫は嫌な気持ちを抑えて笑って許してくれるだろうと想像しているから。
② 自分が憎まれ口を利いても、たいていはただ黙り込むだけだったことに、夫は後ろめたさを感じながら今も笑って聞き流そうとしているだろうと想像しているから。
③ かつては息子の元へ行きたいと言い、今は息子も夫も自分のそばにいてほしいと言う、身勝手な自分のことを、夫はあきれつつ受け入れて笑ってくれるだろうと想像しているから。
④ 亡くなった息子だけでなく夫の分までキュウリで馬を作っている自分のことを、以前からかったときと同じように、夫は今も皮肉交じりに笑っているだろうと想像しているから。
⑤ ゆったりとした表情を浮かべた夫の写真を見て、夫に甘え続けていたことに今さら気づいた自分の頼りなさを、夫は困ったように笑っているだろうと想像しているから。

(note)

現代文論述 S

OUR TEXTBOOK 2024

2 学期

Features

「実戦」へ

1.方向性を確認する

102　**中屋敷均「科学と非科学のはざまで」　東大 19・理文共通**

106　**松嶋健「ケアと共同性―個人主義を超えて」　東大 21・理文共通**

2.実戦トレーニング

当日配布

3.秋期講習

共通テスト対策（別途配布）

1　評論　実戦　方向性の確認❶

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

「カオスの縁」という言葉をご存知だろうか？　この「カオスの縁」とは、一九六〇年代から行われているセル・オートマトンと呼ばれるコンピューター上のプログラムを使った研究が端緒となり提唱された概念である。とても大雑把に言えば、二つの大きく異なった状態（相）の中間には、その両側の相のいずれとも異なった、複雑性が非常に増大した特殊な状態が現れる、というようなことを指している。

身近なイメージで言えば、〝水〟を挙げられるだろうか。ご存知のように、水は気体・液体・固体という三つの形態をとる。たとえば気体の水蒸気は、水分子の熱運動が大きくなり、各分子が分子同士の結合力の束縛から放たれ、空間の中で自由気ままに振舞っている非常に動的な姿である。一方、氷は水分子同士が強固に結合し、各分子は自身が持つ特性に従って規則正しく配列され、理にかなった秩序正しい形を保っている静的な状態だ。

その中間にある液体の、いわゆる〝水〟は、生命の誕生に大きく[a]コウケンしたと考えられる、柔軟でいろんな物質と相互作用する独特な性質を多数持っている。水蒸気とも氷ともかなり異なった特性である。この〝水〟の状態で水分子が存在できる温度範囲は、宇宙のスケールで考えるなら、かなり狭いレンジであり、実際〝水〟を湛えた星はそうそう見つからない。巨視的に見れば〝水〟は分子同士が強固に束縛された氷という状態から、無秩序でカオス的に振舞う水蒸気という状態への過渡期にある特殊な状態、すなわち「カオスの縁」にある姿と言えるのかもしれない。

この「カオスの縁」という現象が注目されたのは、それが生命現象とどこかつながりを感じさせるものだったからである。生き物の特徴の一つは、この世界に「形」を生み出すことだ。それは微視的には有機物のような化学物質であり、少し大きく見れば、細胞であり、その細胞からなる我々人間のような個体である。そして、さらに巨視的に見れば、その個体の働きの結果できてくるアリ塚であったり、ビーバーのダムであったり、東京のような巨大なメガロポリスであったりする。

しかし、こういった生物の営みは、ア自然界ではある意味、例外的なものである。何故なら、この世界は熱力学第二法則（エントロピー増大の法則）に支配されており、世界にある様々な分子たちは、より無秩序に、言葉を変えればカオスの方向へと、時間と共に向かって

いるはずだからである。そんなカオスへ向かいつつある世界の中で、「形あるもの」として長期間存在できるのは、一般的に言えば、それを構成する原子間の結合が極めて強いものであり、鉱物や氷といった化学的な反応性に乏しい単調な物質が主なものである。

ところが、生命はそんな無秩序へと変わりつつある世界から、自分に必要な分子を取り入れ、そこに秩序を与え「形あるもの」を生み出していく。その姿はまるで「カオスの縁」にたたずみ、形のないカオスから小石を拾い、積み上げているかのようである。また、その積み上げられる分子の特徴は、鉱石などと違い、反応性に富んだ物質が主であり、〝不動〟のものとして作り出されるのではなく、偶発的な要素に反応し、次々に違う複雑なパターンとして、この世に生み出されてくる。そして、それらは生命が失われれば、また形のない世界へと飲み込まれ、そこへと還(かえ)っていくのだ。それは分子の、この世界における在り方という視点で考えれば、〝安定〟と〝無秩序〟の間に存在する、極めて特殊で複雑性に富んだ現象である。

〝また、生命の進化を考えてみよう。進化は、自己複製、つまり「自分と同じものを作る」という、生命の持続を可能とする静的な行為と、変異、つまり「自分と違うものを作る」という、秩序を破壊する、ある種、危険を伴った動的な行為の、二つのベクトルで成り立っている。現在の地球上に溢(あふ)れる、大きさも見た目も複雑さもその生態も、まったく違う様々な生命は、その静的・動的という正反対のベクトルが絶妙なバランスで作用する、その〝はざま〟から生まれ出てきたのだ。

生命は、原子の振動が激しすぎる太陽のような高温環境では生きていけないし、逆に原子がほとんど動かない絶対零度のような静謐(せいひつ)な結晶の世界でも生きていけない。この単純な事実を挙げるまでもなく、様々な意味で生命は、秩序に縛られた静的な世界と、形を持たない無秩序な世界の間に存在する、イ何か複雑で動的な現象である。「カオスの縁」、つまりそのはざまの空間こそが、生命が生きていける場所なのである。

「生きている」科学にも、少しこれと似た側面がある。科学は、混沌(こんとん)とした世界に、法則やそれを担う分子機構といった何かの実体、つまり「形」を与えていく人の営為と言える。たとえば、あなたが街を歩いている時、突然、太陽がなくなり、真っ暗になってしまったとする。一体、何が起こったのか、不安に思い、混乱するだろう。実際、古代における日食や月食は、そんな出来事だった。不吉な出来事の予兆とか、神の怒りとして、恐れられてきた歴史がある。

しかし、今日では日食も月食も物理法則により起こる現象であることが科学によって解明

され、何百年先の発生場所、その日時さえ、きちんと予測することができる。それはある意味、人類が世界の秩序を理解し、変わることない 不動 の姿を、つかんだということだ。何が起こったのか訳が分からなかった世界に、確固とした「形」が与えられたのだ。

一方、たとえばガンの治療などは、現在まだ正答のない問題として残されている。外科的な手術、抗ガン剤、放射線治療。こういった標準治療に加えて、免疫療法、鍼灸(しんきゅう)、食事療法など b ダイタイ医療と呼ばれる療法などもあるが、どんなガンでもこれをやれば、まず完治するというような療法は存在しない。そこには科学では解明できていない、形のはっきりしない闇のような領域がまだ大きく広がっている。しかし、この先、どんなガンにも効果があるような特効薬が開発されれば、ガンの治療にはそれを使えば良い、ということになるだろう。

それは、かつて c サイキンの感染症に対して抗生物質が発見された時のように、世界に新しい「形」がまた一つ生まれたことを意味することになる。このように人類が科学により世界の秩序・仕組みのようなものを次々と明らかにしていけば、世界の姿は固定され、新たな「形」がどんどん生まれていく。ウ それは人類にもたらされる大きな福音だ。

しかし、また一方、こんなことも思うのだ。もし、そうやって世界の形がどんどん決まっていき、すべてのことが予測でき、何に対しても正しい判断ができるようになったとして、その世界は果たして、人間にとってどんな世界なのだろう？　生まれてすぐに遺伝子診断を行えば、その人がどんな能力やリスクを持っているのか、たちどころに分かり、幼少時からその適性に合わせた教育・訓練をし、持ち合わせた病気のリスクに合わせて、毎日の食事やエクササイズなども最適化されたものが提供される。結婚相手は、お互いに遺伝子型の組合せと、男女の相性情報の膨大なデータベースに基づいて自動的に幾人かの候補者が選ばれる。

科学がその役目を終えた世界。病も事故も未知もない、そんな神様が作ったユートピアのような揺るぎのない世界に、むしろ「息苦しさ」を感じてしまうのは、私だけであろうか？

少なくとも現時点では、この世界は結局のところ、「分からないこと」に覆われた世界である。目をつぶって何かに、それは科学であれ、宗教であれ、すがりつく以外、心の拠(よ)りどころさえない。しかし、物理的な存在としての生命が、「カオスの縁」に立ち、混沌から分子を取り入れ「形」を作り生きているように、知的な存在としての人間はこの「分からない」世界から、少しずつ「分かること」を増やし「形」を作っていくことで、また別の意味で「生きて」いる。その営みが、何か世界に〝新しい〟空間 を生み出し、その営みそのものに人の

〝喜び〟が隠されている。そんなことを思うのだ。

だから、世界に新しい「形」が与えられることが福音なら、実は「分からないこと」が世界に存在することも、また福音ではないだろうか。目をつぶってしがみつける何かがあることではなく。

「分からない」世界こそが、人が知的に生きていける場所であり、世界が確定的でないからこそ、人間の知性や「決断」に意味が生まれ、そして「アホな選択」も、また許される。いろんな「形」、多様性が花開く世界となるのだ。それは神の摂理のような〝真実の世界〟と、混沌が支配する〝無明の世界〟とのはざまにある場所であり、また「科学」と、まだ科学が把握できていない「非科学」のはざま、と言い換えることができる空間でもある。

（中屋敷均「科学と非科学のはざまで」による）

問一　傍線部ア「自然界ではある意味、例外的なものである」とはどういうことか、説明せよ。

問二　傍線部イ「何か複雑で動的な現象」とはどういうことか、説明せよ。

問三　傍線部ウ「人類にもたらされる大きな福音」とはどういうことか、説明せよ。

問四　傍線部エ「いろんな『形』、多様性が花開く世界」とはどういうことか、本文全体の趣旨を踏まえて一〇〇字以上一二〇字以内で説明せよ（句読点も一字として数える）。

問五　傍線部ａ・ｂ・ｃのカタカナに相当する漢字を楷書で書け。

2　評論　実戦　方向性の確認❷

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

「近代化」は、それがどの範囲の人びとを包摂するかによって異なる様相を示す。「第一の近代」と呼ばれるフェーズでは、市民権をもつのは一定以上の財産をもつ人にかぎられている。それは、個人の基盤が私的所有におかれており、財の所有者であってはじめて自己自身を所有するという意味での自由を有し、ゆえに市民権を行使することができるとみなされたからである。この制限は徐々に取り払われ、成人男子全員や女性に市民権が拡張されていく。市民権の拡張とともに今度は、社会的所有という考えにもとづき財を再配分する社会保障制度によって、「第一の近代」から排除されていた人びとが包摂され、市民としての権利を享受できるようになる。これがいわゆる福祉国家であり、人びとはそこで健康や安全など生の基盤を国家によって保障されることになったのである。それでも、理念的には国民全体を包摂するはずの福祉国家の対象から排除される人びとはつねに存在する。

人類学者が調査してきたなかには、国家を知らない未開社会の人びとだけではなく、すでに国民国家という枠組みに包摂されたなかで生きる人たちもいる。ただそこには、なんらかの理由で国家の論理とは別の仕方で生きている人たちがいて、国家に抗したり、その制度を利用したりしながら生きており、そうした人たちから人類学は大きなインスピレーションを得てきた。ここでは、国家のなかにありながら福祉国家の対象から排除された人びとが形づくる生にまつわる事例を二つ紹介しておこう。

第一の例は、田辺繁治が調査したタイのＨＩＶ感染者とエイズを発症した患者による自助グループに関するものである。タイでは一九八〇年代末から九〇年代初頭にかけてＨＩＶの爆発的な感染が起こった。そのなかでタイ国家がとった対策は、感染していない国民の感染予防であり、その結果すでに感染していた者たちは逆に医療機関から排除され、さらには家族や地域社会からも差別され排除されることになった。孤立した感染者・患者たちは互いに見知らぬ間柄であったにもかかわらず、生き延びるために、エイズとはどんなものでそれをいかに治療するか、この病気をもちながらいかに自分の生を保持するかなどをめぐって情報を交換し、徐々に自助グループを形成していった。

ＨＩＶをめぐるさまざまな苦しみや生活上の問題に耳を傾けたり、マッサージをしたりといった相互的なケアのなかで、感染者たちは自身の健康を保つことができたのだ。それは「新

たな命の友」と呼ばれ、医学や疫学の知識とは異なる独自の知や実践を生み出していく。そこには非感染者も参加するようになり、ア ケアをする者とされる者という一元的な関係とも家族とも異なったかたちでの、ケアをとおした親密性にもとづく「ケアのコミュニティ」が形づくられていった。「近代医療全体は人間を徹底的に個人化することによって成立するものであるが、そこに出現したのはその対極としての生のもつ社会性」（田辺）だったのである。

こうした社会性は、福祉国家における公的医療のまっただなかにも出現しうる。たとえば筆者が調査したイタリアでは、精神障害者は二〇世紀後半にいたるまで精神病院に隔離され、市民権を剝奪され、実質的に福祉国家の対象の埒外（らちがい）に置かれていた。なぜなら精神障害者は社会的に危険であるとみなされていて、彼らから市民や社会を防衛しなければならないと考えられていたからである。精神病院は治療の場というより、社会を守るための隔離と収容の場であった。

しかしこうした状況は、精神科医をはじめとする医療スタッフと精神障害をもつ人びとによる改革によって変わっていく。一九六〇年代に始まった反精神病院の動きは一九七八年には精神病院を廃止する法律の制定へと展開し、最終的にイタリア全土の精神病院が閉鎖されるまでに至る。病院での精神医療に取って代わったのは地域での精神保健サービスだった。これは医療の名のもとで病院に収容する代わりに、苦しみを抱える人びとが地域で生きることを集合的に支えようとするものであり、イ「社会」を中心におく論理から「人間」を中心におく論理への転換であった。精神医療から精神保健へのこうした転換は公的サービスのなかで起こったことであり、それは公的サービスのなかに国家の論理、とりわけ医療を介した管理と統治の論理とは異なる論理が出現したことを意味している。

その論理は、私的自由の論理というより共同的で公共的な論理であった。たとえば、病院に代わって地域に設けられた精神保健センターで働く医師や看護師らスタッフは、患者のほうがセンターにやってくるのを待つのではなく、自分たちの方から出かけて行く。たとえば、地域に住む若者がひきこもっているような場合、個人の自由の論理にしたがうことで状況を放置すると、結局その若者自身と家族は自分たちではどうすることもできないところまで追い込まれてしまうことになる。そのような事態を回避し、地域における集合的な精神保健の責任をスタッフは負うのである。そこにはたしかに予防的に介入してリスクを管理するという側面がともないはするが、そうした統治の論理を最小限化しつつ、苦しむ人びとの傍らに

寄り添い彼らの生の道程を共に歩むというケアの論理を最大化しようとするのである。

二つの人類学的研究から見えてくるのは、個人を基盤にしたものとも社会全体を基盤におくものとも異なる共同性の論理である。この論理を、明確に取り出したのがアネマリー・モルである。モルはオランダのある町の大学病院の糖尿病の外来[a]シンサツ室でフィールドワークを行い、それにもとづいて実践誌を書いた。そのなかで彼女は、糖尿病をもつ人びとと医師や看護師の協働実践に見られる論理の特徴を「ケアの論理」として、「選択の論理」と対比して取り出してみせた。

ウ 選択の論理は個人主義にもとづくものであるが、その具体的な存在のかたちは市民であり顧客である。この論理の下で患者は顧客となる。医療に従属させられるのではなく、顧客はみずからの欲望にしたがって商品やサービスを主体的に選択する。医師など専門職の役割は適切な情報を提供するだけである。選択はあなたの希望や欲望にしたがってご自由に、というわけだ。これはよい考え方のように見える。ただこの選択の論理の下では、顧客は一人の個人であり、孤独に、しかも自分だけの責任で選択することを強いられる。インフォームド・コンセントはその典型的な例である。しかも選択するには自分が何を欲しているかあらかじめ知っている必要があるが、それは本人にとってもそれほど自明ではない。

対してケアの論理の出発点は、人が何を欲しているかではなく、何を必要としているかである。それを知るには、当人がどういう状況で誰と生活していて、何に困っているか、どのような人的、技術的リソースが使えるのか、それを使うことで以前の生活から何を[b]アキラめなければならないのかなどを理解しなければならない。重要なのは、選択することではなく、状況を適切に判断することである。

そのためには感覚や情動が大切で、痛み苦しむ身体の声を無視してたとえば薬によっておさえこもうとするのではなく、身体に深く棲(す)みこむことが不可欠である。脆弱(ぜいじゃく)であり予測不可能で苦しみのもとになる身体は、同時に生を享受するための基体でもある。この薬を使うとたとえ痛みが軽減するとしても不快だが、別のやり方だと痛みがあっても気にならず心地よいといった感覚が、ケアの方向性を決める[c]ラシン盤になりうる。それゆえケアの論理では、身体を管理するのではなく、身体の世話をし調(ととの)えることに主眼がおかれる。そこではさらに、身体の養生にかかわる道具や機械、他の人との関係性など、かかわるすべてのものについて絶え間なく調整しつづけることも必要となる。つまりケアとは、「ケアをする人」と「ケアをされる人」の二者間での行為なのではなく、家族、関係のある人びと、同じ病気

をもつ人、薬、食べ物、道具、機械、場所、環境などのすべてから成る共同的で協働的な作業なのである。エ<u>それは、人間だけを行為主体と見る世界像ではなく、関係するあらゆるものに行為の力能を見出す生きた世界像につながっている。</u>

（松嶋健「ケアと共同性――個人主義を超えて」による）

問一　「ケアをする者とされる者という一元的な関係とも家族とも異なったかたちでの、ケアをとおした親密性」（傍線部ア）とはどういうことか、説明せよ。

問二　『社会』を中心におく論理から『人間』を中心におく論理への転換」（傍線部イ）とはどういうことか、説明せよ。

問三　「選択の論理は個人主義にもとづくものである」（傍線部ウ）とはどういうことか、説明せよ。

問四　「それは、人間だけを行為主体と見る世界像ではなく、関係するあらゆるものに行為の力能を見出す生きた世界像につながっている」（傍線部エ）とはどういうことか、本文全体の趣旨を踏まえて一〇〇字以上一二〇字以内で説明せよ（句読点も一字と数える）。

問五　傍線部ａ・ｂ・ｃのカタカナに相当する漢字を楷書で書け。

3～8　実戦テストゼミ

(note)